
条件付きの結婚生活

八月葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

条件付きの結婚生活

【Zコード】

N7795W

【作者名】

八月葉月

【あらすじ】

管家の娘、褒？は変人として有名だった。高官の父を持つも主だつた宴に顔を見せることはなく、ただただ変人と称される噂が流れるばかり。そんな彼女に突然、縁談の話が舞い込んできた！しかし、なんとお相手はこの国の皇帝？！誰もが羨む相手からの縁談話に、褒？は全く乗り気ではない どころかすっぱりお断りしたかった。しかし、彼女の抵抗も虚しく両親に説得され、やむなく了承するハメに…。けれど、ただで納得するのは癪に障る。そこで褒？は結婚の了承に際し、とんでもない条件をつけた！ しかも、ど

うやら彼女にはまだまだ秘密があるよつで……？　ドキー　ハハ？

中華ファンタジーが今ここに開かれるー

降ってきた縁談

何故、こんなことになつてているのだろう？

壯麗な儀式が肃々と進み、大宗伯だいそうはくの朗々たる声が神殿内に響く中、当事者であるはずの管褒かんほうじ？は遠くこの状況の始まりを思い出していた。

* * *

ことの始まりは十日程前

日が暮れ、夕餉の時刻になつた管家の邸の広い居間からは楽しげな声が漏れていた。

その日、珍しく早く帰つてきた父を交えて、褒？は家族三人での夕餉を楽しんでいた。

久々の家族揃つての食事に満腹感と幸福感に満たされていた褒？は、両手で茶器を抱え、嬉しそうに食後のお茶を飲んでいる。

そんな褒？に突然、父が爆弾を落とした。

「褒？、嫁ぎ先が決まつたよ」

突然放たれた爆弾に褒？は目を丸くする。

「誰のですか？」

誰のことを指しているのかは分かっていたが、すっとぼけて取り敢えず交わしてみる。

だが、甘くない父をそれくらいで交わせねばもなかつた。

「褒? のだよ」

「父様……、正氣ですか?」

あつさり突きつけられた答えに本氣で父の正氣を疑つてしまつ。やんな娘の態度に全く怯むことなく、父はこいつと笑つて断言してくれた。

「正氣で本氣だよ」

その顔を見て悟る。

(本氣で本氣で言つてゐる……)

彼女は父の本氣に思わず眉を顰める。同時にどうやらばこの話を断れるかを懸命に考えた。

だがすぐに名案など浮かぶはずもなく、今度は冗談に出来ないかと考え出す。

そんな、乗り気ではない といふか嫌そうな褒? の様子に父の顔が悲しそうに歪んだ。

「嫌、なのかい?」

「うつ……」

それはそれは悲しそうな顔で言われると、即答で頷けず、答えて詰

まつてしまつ。

しかも性質の悪い父は本氣で悲しんでいたのだ。そんな父を

切り捨てるだけの冷酷さも強さも持っていない褒？は、断腸の思いで話を進める。

「……お相手の方によります」

その言葉に精一杯の想いと抵抗が詰まっていた。しかし、褒？が話を進めたことに気を良くした父は、娘の小さな抵抗などものともせずにつっこりと笑つた。

「それなら大丈夫だよ。お相手は李辟方様だから」

「李……？ 皇帝陛下ですか？！」

「ああ」

李姓は代々この国の國主の血筋が名乗る姓だ。つまり、李辟方それはこの西国せんごくの皇帝の名なだつた。

予想すらしていなかつた名前が出て褒？はぎよつとする。彼女は否定して欲しくて、身を乗り出して反射的に確認するが、それもあつさりと肯定されてさあつと青褪めた。

諦めて結婚出来るような相手ではない。といつか、王の妻なんてそんな重責背負いたくない。

褒？は形振り構わず叫んでいた。

「無理です！」

「どうしてだい？」

不思議そうに聞き返す父が腹立たしい。

(分かつてゐるくせに……ーー)

それでも父を責めることなど出来るはずもなく、けれど受け入れる

ことも出来なくて、恨めしそうに父を睨んでしまつ。

娘のその表情に、流石に気が咎めた父は困つたように笑つた。

「だつて貴族は嫌なんだろ?」

「……貴族は嫌いです」

「それなら王族ならいいだろ? 王族は貴族じゃない」

「つ! それは屁理屈です!!」

今度は切り捨てた娘に、父は益々困り顔で笑う。本当に困り果てている父の姿を見ていると、じわじわと罪悪感が湧き上がってくる。けれど今度ばかりは折れるわけにはいかない。自分が折れればすぐさまに皇帝との結婚が決まってしまうのだ。

ぐつと歯を食いしばり揺れそうになる心を奮い立たせる。膠着状態になってしまった二人をみかねて、今まで様子を見守るだけだった母が口を開いた。

「后になれば責任を負う」とになるわ。だから貴女が軽々しく頷けないのも当然ね

「母様……！」

母の言葉に褒ほめあつと瞳を輝かせる。だが

「けれど、お父様の話もきちんと聞いてあげて?」

美しい顔で穏やかに微笑んでそつ付け加えた母に泣きたくなる。

(やうだつた……。結婚してからもう20年以上経つのに、未だにラブラブなんだつた……)

公然といちゃいちゃベタベタする両親だ。父が一番な母が、父の敵

になるはずがなかつた。

一度持つた希望を跡形もなく碎かれたせいで、思いのほかショック
が大きくがっくりと頃垂れてしまつ。相変わらず母は強い。娘でも
容赦なかつた。

打ちひしがれ、居間の卓に突つ伏す褒?を哀れに思ったのか、彼女
の頭を父が優しく撫でる。

「褒?だから大丈夫だと思つたんだよ?」

見事な飴と鞭だ。

思わずほどされそうになつてしまつ。

それでも褒?は頷けなかつた。

両親が自分を愛してくれていてることも、大切に想つてくれていて
とも知つていて。

自分の身と将来を案じて縁談を持つてきてくれていてることも。
今までに来た縁談の話も、両親が吟味を重ねて良縁を選んでくれて
いた。それでも頑なに拒み続けたのは自分だ。両親はその理由を知
つているからこそ、強く薦めては来なかつた。
だから褒?は両親の優しさに甘えていたのだ。いつまでもそのまま
ではいられないと分かつていながら、問題を先送りにしてきた。そ
のツケがいよいよ回つてきたらしい。

簡単には断れない事情があることを察した褒?は、顔を上げると両
親を見つめた。

「事情を話して」

そんな娘の姿に一人は頬を緩める。両親が隠している事情を慮つて

讓歩した娘が誇らしくて愛しい。

「陛下には后も妃もない。王に子供がないというのは国の大なんだ。今の状態のまま王が亡くなられてしまえば次の王位を巡って内乱が起きてしまう」

「……」

「ここまではいいか？」と視線で聞いてくる父に無言で頷く。それから黙つて先を促すと父は真剣な顔をして更に続けた。

「だがそれよりも深刻なのは、空席の后的座を争つて陰で動いている者たちだ。いつまでも席が埋まらないために、その争いが熾烈化している。このままでは下手をすると内乱に発展しかねない」

「そんなに？」

「残念なことにね。そして、そんな所を他国に突かれたらこの国が危ない」

「……」

「50年前の大戦以来、この国は決して豊かとは言えない。その上、近年は不作続きで民も食えている。今は国を富ませることを優先しなければならない。そんな時に内乱など起こすわけにはいかないんだ」

そこまで深刻な事態に陥っているとは思つていなかつた褒?は驚いてしまつた。何も知らなかつた自分に腹が立つて、膝の上で拳を握る。

そんな娘の姿に微笑みながら、母が付け足した。

「それに王宮ならば貴女も安全に暮らせるわ。王宮の守りは鉄壁だもの」

「ああ。王宮に渦巻いている、人の悪意や害意ならどうとも対処

出来るからな」

まるで簡単なことのようにあっさりと言いつて切る父はどうかと思ひ。 壊? としては頼もしい限りだが……。

しかし、国家の危機よりも後に付け足された二人の言葉の方が困つた。

そんなことを言われたら、もう、断れない。

(ズルイなあ、もう……)

心の中でそう拗ねてみる。といふか、もう拗ねるしかない。
俯いてそんなことを思つていると、クスクスと笑う声が聞こえて視線を上げた。

すると、両親が揃つて壊? を見て笑つている。
どうやら心の中だけで拗ねていたはずなのに、顔にも出でいたらし
い。用心して俯いていたのに全く意味がなかつたようだ。

そのことに更に拗ねくなつた壊? はあることを思いついた。この
ますんなり承諾するのも癪だし、これでこの話が流れるのならば
それはそれで都合がいい。それにこれは以前にも話したことがある
し、常日頃から気にしていることでもあるからまあいいかと簡単に
決めると、両親を見つめてからにっこりと微笑んだ。

「分かりました。そのお話、御受け致します。……ただし、条件が
あります」

降ってきた縁談（後書き）

どうも。初投稿です。

いちやいちやする一人が書きたくて作りました。

ついでに好きなもの詰め込みまくったので、脱線しやすいです（苦笑）

試行錯誤しながら頑張りますので、どうぞ宜しくお願ひします。

婚姻の儀

(私が甘かつたわ……まさか皇帝があんな条件を飲むなんて……)

褒?は自分で条件を突きつけておきながらそのことは棚に上げて、条件をあつさりと飲んだ横の男と心の距離を取る。今は残念ながら身体は離れられないが……。

何故なら、今、王宮内にあるこの誓言の間では褒?と横の男　基もとい
今上帝李辟方との婚姻の儀が執り行われていた。

『誓言の間』といつのは、国家に関わる儀礼や祭祀を執り行う場で古くからこの王宮に存在している。その室内は豪華というよりは流麗だった。目にも鮮やかな朱色の柱が等間隔に並び、壁には純白の布が幾重にも垂れ下がっている。天井窓から降り注ぐ陽光をその布が反射して、室内に神秘的な雰囲気を醸し出していた。そこに正装の高官と春官がすらりと並ぶ様は壯觀であった。

更に室の奥、床が少し高くなっている壇上の奥の壁にはこの国の国章が刻まれ、その前に設えられた式儀棚には、国の神器である銅鏡と銅劍、銅器が置かれ、銅器の中には灰が詰まつており、そこには儀礼で使用する式儀香が刺さつてゆらゆらと煙を上げていた。

その式儀棚の前には礼法や祭祀を司る春官の長である大宗伯が立ち、朗々とした声を室内に響かせながら婚姻の宣誓を宣つている。

だが、壮麗な儀式の中、壇上に上がる階の下で皇帝と並びながらその声を聞く褒?には、難しい宣誓の祝詞の言葉も意味も理解出来ないため、退屈しきつっていた。

そこでこの始まりに思いを馳せていましたが、思い出していたらその時の不満をも思い出してしまい段々と考えが愚痴っぽくなつてゐる。

(それにして、なんで皇帝の婚姻の儀がこんなに早い訳? 公布^{ふれ}が出てからまだ十日しか経っていないのに……本当に最悪……)

褒?は周囲には気付かれぬように小さくため息を付くと、すぐに思考を切り替える。不満を挙げても現状が変わるわけではないのだから、それは不毛な行為だ。そう割り切つてすぐに考えるのを止めるとして、今度は暢気なことを考え始めていた。

(大宗伯の爺爺^{じいちゃん} 良い声してるなあ……渋くて痺れる)

というのも、さうでもしないと気がまぎれないからだ。褒?としては、儀式のためにと過度なほど飾り付けられた衣装や飾りが鬱陶しくて仕方なかつた。

皇后の嘉礼服である?衣は丈が長く、袖口も広く布をふんだんに使つた代物で、鮮やかな朱色の絹地に金糸などによつて描かれた鳳凰の刺繡が優美に舞つていた。また、彼女がまとつている黒く細長い領巾^{ひれ}も、黒の絹地に金糸等によつて李花^{すもものはな}などが刺繡されている。こんな見ただけで高価な品だと分かる上に、肌触りも良くて傷付けたり汚したりしないかと気を遣つてしまつう衣装は嬉しくない。逆に疲れる。

その上、髪の毛はどうがどうなつているのかも分からぬ程複雑に編みこまれ、櫛やら簪やら真珠やらをふんだんに飾り付けられて、重くて痛かつた。

流石の自分でも婚礼衣装にはつきつきとはしゃいでしまうかと思つていたのだが、そんなことは全くなかつた。それ所が今すぐ脱ぎた

いぐらいだつた。

褒？はちりじと横に立つ皇帝を盗み見る。

此方も嘉礼服である冕服べんふくを着てしつかりめかしこんでいた。丈が長く、袖口も広く布をふんだんに使つた代物で、ただし彼女の衣装とは違ひ此方は鮮やかな朱色の絹地に刺繡は一切ない。交領には黒の絹地に李花などが刺繡されていて、下裳には莊厳な龍が描かれ、見事に映えている。更に髪をきつちりと結い上げられ、黒い冕冠べんかんを被つていた。

見てゐるだけで肩が凝りそうな衣装だ。だが、皇帝は全く顔色も表情も変えることなく大宗伯の祝詞を聞いている。

褒？は「こんな格好をしていてよく平氣な顔をしていられるな」と思わず感心してしまつた。

ついでとばかりに夫となる男をじーっと観察してみる。だが、視線を感じたのか皇帝が横目で此方を見た拍子に彼とびっちり目が合つてしまつた。

その視線に値踏みするよつた意図を感じた褒？は反射的に横目で彼を睨みつける。すると、皇帝は意外そうに目を見開いた後、愉快そうに口端えみを吊り上げた。

その反応は馬鹿にそれでいるよつでものすじく腹が立つた。怒りの情動のままに彼に掴みかかるつと思つたが、タイミングよく大宗伯が一人に声を掛けてきた。

「お一方、どうぞ前へ」

その言葉ではつと我に返つた褒？は、怒りを飲み込んで前を向くと皇帝と足並みを揃えて階を上つた。壇上に上がつてから三歩進んで

ピタッと立ち止まる。

「では、誓言を」

目の前にいた大宗伯が静かに下がり、壊？たちは再び揃つて歩く。今度は式儀棚の前で足を止める、片膝を付いて両手を合わせ、拱手の型をとり、頭を垂れて礼をする。その後、頭を上げ、体の中心で三度拍手を打ち、誓言する。

「古くより此の地を護りし英靈よ。我が一族に新たな血が加わることを御報告申し上げる。此れより先は新たな血と共に国のために尽力し、民に繁栄をもたらすことを、そして、対となる新たな血を愛し護りゆくことを西国國主李辟方が誓う」

嘗々とした声で皇帝が告げた。それを聞き終えてから、一度深呼吸をして壊？も声を上げる。

「古くより此の地を護りし英靈よ。彼の一族に新たに加わることを御報告申し上げる。此れより先は一族の一員として共に国のために尽力し、民に安らぎをもたらすことを、そして、対となる一族を愛し支えていくことを管家一姫管壊？が誓う」

声が震えなかつたことに満足しつつ、再び頭を垂れる。それから立ち上がりて振り向くと、壊？は横から差し出された手に自分の手を重ねた。そのまま壇上の終わりまで戻ると、それに合わせて一人の後ろに立つた大宗伯が声を張り上げる。

「[イ]に誓約は成された。國を代表して^祝言祝ぎ申し上げます」

「おめでとう御座います」

後半を一人に向かって優しく告げた大宗伯の言葉に続き、誓言の間に集つた立礼した官吏たちからも祝いの言葉が合唱された。
それに褒？と皇帝は軽く頷くことで応える。

「これにて誓約の儀は無事終えられた」

「朱の国旗と祝音を上げろ。これより三日続く『朱の祝祭』の始まりだ！」

大宗伯の言葉によつて誓約の儀は締めくくられ、続く皇帝の言葉で國を挙げての宴が始まった。

初夜（1）

誓約の儀が終わり、その後の宴で国内の貴族や有力者、官吏への挨拶も済ませた褒？は、案内された室の寝台ですっかりのびていた。

それもそのはず、誓約の儀とお披露日の宴で普段は遣わない様な気を遣いまくり、作り笑いをし過ぎた結果、心身共に疲れていた。その上、自分の室に案内されるや否や侍女たちに服を引ん剥かれ、何故かついてこようとする侍女を追い返しつつ湯浴みをし、肌を磨くためとマッサージをされた。

その後、すーすーして薄くて脱がしやすい夜着である、丈が長く裾の広がったゆつたりした緋あかい深衣おくみを袴おろきで留められ、そこによろよろと侍女たちが退室して解放されたのだ。

どうやら総てはこれから行われる儀式の準備だつたらしい。

茜国せんこくは建国からもなく500年経つ伝統ある国だ。そのため、古くからの因習や伝統が所々に残っている。特に儀礼や祭祀ではその傾向が顕著に現れている。

皇帝の婚姻もその例に漏れず、先ほどの『誓約の儀』や花嫁の室に花婿めいじゆが三連夜通う『華連夜』など一言に『婚姻の儀』と言つても内容は様々だ。

その儀式のひとつである『華連夜』がこれから此処で行われるのだ。こつ書くと神聖な儀式のようだが、ぶつちやけた話ただの初夜のことで、花婿と花嫁の性行為だ。

「……あー」

そのことを考えると気が重い。

褒？は顔の上で腕を交差させて視界を覆つた。

両親の想いに絆されたとはいえ、覚悟を決めて嫁いで来た。当然そういういた行為も含めて。

だがしかし。

「私は誰かと口付けたこともないんだぞ？　いきなり性交つて難題過ぎだらう！」

かなり恥ずかしい告白を大声で叫んでいた。

「随分面白い出迎え方だな？」

「！」

いつの間にかそこに立っていたのは夫となつた皇帝李辟方りくへきほうだつた。彼は、褒？が投げた千本せんばんと呼ばれる細長い針を右手に持つて、にやにやと笑いながら寝台に近づいてくる。

先ほどの告白を聞かれたことに羞恥を覚えるも、この男の態度に腹が立つていた褒？は自分の赤くなつた顔など見られたくないかった。冷めた表情で彼を睨みながら、表情が変わらないように気合いで顔に集まりそうになる血を散らす。成功していたかどうかは分からないが。

「千本で死ぬ訳ないでしょう？　そんなことも分からんですか

？」

「…………。まあ、心配するな。仕方なくとはいえ娶った責任は取る。じつへじ可愛がつてやら」

可愛くない返答に一瞬寄った眉をすぐに戻すと、辟方は不敵に笑いながら寝台の上に膝をつく。そのまま右手で身体を押し倒された寝？は抗うことなく、ぼすんと寝台に押し倒された。

雜な扱いに思わず睨むと面白がるようにな笑われる。そのことに更に腹が立つのですが、人の上に乗つて悪趣味にも笑つているのは仮にも自分の夫であり、この国の皇帝だ。

我慢我慢と自分に言い聞かせて殴りそつになる衝動をなんとか抑える。

だが、そんな寝？の努力を嘲笑つようにな笑いながら、今度は顔を近づけて口付けようとしてくる辟方の瞳が観察するようにな冷めているの気付く。

どひやら寝？は試されていんじこ。

「……ああ、もひ駄目。無理。絶対、無理！！」

我慢の限界だつた。

悉く人の神経を逆撫でしていく態度に怒りを抑えきれず、その衝動のままに寝？は拳を繰り出した。

辟方は突如顔に迫ってきた拳にぎょっとして、慌てて仰け反り、なんとかその拳をかわしたが、その拍子に体勢を崩してしまう。その隙に寝？は下敷きにされていた足を抜き、その足を延ばして辟方の腹に叩き込む。それを避けることの出来なかつた辟方は、打ち込まれた衝撃で寝台から転げ落ち、床に尻餅を付いた。

それを見て溜飲を下げた寝？はふんと一息つくと、寝台に背筋を伸ばして座り、辟方を見下ろす。

「どうやら私達こま話しえいが必要かと存じます」

「あ？」

畏まつて言つた褒？を胡乱な田で見上げながら、辟方は顔を顰めて腹を摩つていた。

そんな彼の様子を無感情に見つめながら褒？は続ける。

「」のままでは危害を加えそつなので

「もう加えてるだらうが……」

呆れたよつに付け加えた辟方に悪びれることなく褒？は開き直つた。

「きちんと手加減しました」

「そういう問題じゃない」

「自業自得です」

「は？」

褒？の思わぬ切り返しに、辟方は訳が分からず思いきり顔を顰める。そんな辟方を睨みながら褒？はまた少し腹が立つたよつて口早に答えた。

「挑発して試したでしょ？」

その問いにああ、と辟方は納得した。それと同時に少し意外そうに褒？を見る。

「気付いてたのか」

「ええ。それに腹が立つたので、つい」

「つい、で殴つて蹴るのか？ お前は……」

「正当防衛です」

「過剰防衛だ」

「あのへりこ避けると思つたので」

「……」

呆れて返した言葉にすかさず答えを被せてくる褒?に、辟方は片頬を引き攣らせた。

そして、横を向いて嫌そうな顔をした彼はぼそりと小声で呟く。

「父親にやつくりだな……」

「?」

その言葉が聞こえなかつた褒?は、不思議そうな顔をして辟方を見ている。

それに一つため息をついて気分を入れ替えると、彼はよつと立ち上がりて褒?とは少し距離をあけて寝台に腰掛けた。

初夜（1）（後書き）

思つたより長くなつたので分割しました。
なので今回はちょっと短めです。

ようやくメイン一人がまともに対面しました。
まだまだ導入部なのでこの辺はなるべく早く更新したいです。
頑張ります～

初夜（2）

「取り敢えず、その話し方は止め」

「？」

突然言われた言葉の意味が分からず褒^{ほひ}?は首を傾げる。辟方^{へきばう}はそんな彼女に少し苛立つたように付け加えた。

「普段の話し方にしんどいと訴つてゐるんだ」

「何故です?」

「お前にそういう話し方をされるのは馬鹿にそれでいて氣^きがして氣^き分が悪い」

子供のように拗ねたように言う辟方に、褒^{ほひ}?は呆れてしまつ。けれど、その姿は先ほどの宴で見せていた王としての顔とは違い、年相応に見えて何だかおかしかつた。

「被害妄想」

「つるさいー 公の場でだけ氣を付ければいい。後は普段通りに話せ」

その申し出は褒^{ほひ}?にとつてもありがたかつた。

元々堅苦しいのは好きではない。両親も普段は碎けた話し方をしていたので、きちんとした言葉遣いは客が来た時と食事の時だけしか使ってこなかつた。だが、流石に後宮に入つてまでそういう訳にはいかないだろう。覚悟をしていたとは言え、これから四六時中言葉に気を付けなければならぬのかと、かなりうんざりしていたのだ。なので、辟方の提案に是も非もなく賛成した褒^{ほひ}?は彼の気が変わら

ない内にと早速肩の力を抜く。

「堅苦しいのは好きじゃないからいいけど……こんなんだよ？ いいの？」

「構わん。その方が違和感がないしな」

「へー」

別に彼の印象などどうでもよかつた褒？は気のない返事をする。そのあまりにも気の抜けた褒？の返事に、辟方は思いきり呆れた。仮にも目の前にいるのはこの国の皇帝であるのにも関わらず、気を抜き過ぎだろう。先ほどまでと落差があり過ぎだ。あまりにも豪胆な彼女の態度に、こちらの気もすっかり抜けてしまう。

「……躊躇いがないな」

「問題が？」

自分で言い出しておいて何か文句もあるのか？ と褒？が睨みつけた。そんな彼女のふてぶてしい表情に辟方はおかしくなつてくる。権力を笠にきて闇雲に他者を抑え付ける気はないが、現在自分が最高権力者であることに変わりはない。その自分にこんな態度を取れる姫がいるとは思わなかつた。

そのことがおかしくて、何故だか少し嬉しい。

「ない！ ……こんな娘だったのか」

褒？は突然くつくつと笑い出した辟方を不審な目で見た。

「……今更後悔してるわけ？」

「してない。憂鬱なだけだ」

憂鬱だ、と言いながら笑っている辟方が不気味でよく分からぬ。
しかし、ここで困惑して相手に主導権を握られてしまつのは褒?の
本意ではないので、なんとか文句を言い返した。

「本人を田の前にしてよくもそんなこと言えるわね?」

「お前も俺のことなぞ氣にしてないからな。俺だけ氣にするのも馬鹿らしいだろ」

「ああ、そうだね」

「……」

あつさりと肯定されて辟方は一瞬言葉を失う。

(肯定するのかよ……)

それから苦笑したよつこまた笑った辟方は、悪戯が成功した子供の
ような笑みを浮かべる褒?に気付き、息が止まつた。幼く見えるそ
の笑みは、この後宮ではほとんど見られないような純粋さで、辟方
の記憶にしつかりと焼きついたのだった。

褒?はそんな彼の様子に首を傾げながら、しかし一瞬でその笑みを
消すと先ほどまでの無表情に戻つてしまつ。

「ついでに言つなら、条件を守らない君が悪い」

「あ? 条件?」

ぼーっとしていた辟方は何を言われたか理解出来ず困惑した。
それに褒?は呆れたように付け加える。

「婚姻を承諾するにあたつて条件をつけたでしょ?」

「ああ。忘れてた」

全く悪びれずに開き直り、しかも今思い出したらしき辟方に、流石の褒?も田を丸くする。

「は?」

「いや、あれは」ひかりに断りせりためのものだと想っていた

何故だか先ほどまでは違ひ、穏やかな田をして話す辟方に、褒?は」感につつも本心を漏らした。

「まあ、そういう意図があつたことも想定しないけど

「けど?」

「本気」

「そうか」

辟方はあつたりと頷いて納得した。
だが、あつさりと納得されるとは思つてみなかつた褒?は訳が分からず困惑する。

「それでいいわけ?」

「別にあの条件が付いひとつ問題ない」

何だか辟方に主導権を握られている気がする。それは面白くない。
そう思った褒?は、主導権を握るべく、取り敢えず怒りせよつと挑発してみるとこした。

わざと褒むよつた田で辟方を見つめながら、少しだけ彼から距離を取る。

「はーん。変態だつたんだ」

「は？ 何でそなうなる？！」

褒？の思惑通りに喰いついて来た辟方に、にんまりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「いや、だつて“目隠し行為”が好きなんでしょう？」

「違う！ 大体お前が付けた条件だろう！ “性行為を行つ際には目隠しをして行つこと”って！」

誤解を解こうと慌てて言い募る辟方の焦りように、褒？は段々と楽しくなつてくる。

「そこが気に入つて婚姻に乗り気になつたと父様に聞いたけど？」
「面白いとは言つた。だがな、それは、そんなことを堂々と条件として突きつけてくる姫がいることが面白かつたんだ。断じてそういう行為が好きなわけではない！」

「へー」

「お前！ 信じてないだろ？！」

褒？は横を向いて適当に返事をした。そのおざなりな態度に、一向に誤解が解けない焦りが昂じた辟方は、身を乗り出し、彼女の肩を掴む。そして、無理矢理自分の方に彼女の体を向けると低く重い声で一言告げた。

「聞け」

初夜（2）（後書き）

すみません。まだまだ続きます。

なんだか人が話し出すと簡単に暴走してくれるので困ります。
暴走して、戻って、書き直してを繰り返して現在ぐるぐる回っています。

お陰で最初の予定と少しずつズレてきました。

まだ4話目なのに……。○rz

あ、性行為といふ言葉が出ましたが直接的な表現はしていないからいいか、といふことでR15指定していません。

それは問題でしょ？！ とか、不愉快です！ と思つた方がいたら一報いただけないと嬉しいです。

私は少しズレているらしくるので常識の基準がいまいち分かっていません。

皆様が頼りです。

ホントお願ひします。

初夜（3）

「あー」

その聲音に、洒落にならない冷たさを感じて褒^ほ?は頬を搔いた。どうやらやり過ぎてしまつたらしい。

半眼でこちらを睨んでいる辟方に、はははと乾いた笑みを向けながら、どうしよう、と内心焦る。

取り敢えず謝つておくか、と安易に結論を出すと、辟方の顔色を上目で窺いながら可愛い子ぶつてみた。

「じめん、ね？」

上目遣いで最後には首を傾げて謝つてみる。どうだ！ 母様直伝！

秘技 懇願ポーズ！

すると、辟方は深々とため息をつき、首を左右に振った。

「お前な……そういうのは美人がやるから効果があるんだ。お前がやつても気持ち悪い。……いや、寧ろ哀れになつてくるな」

辟方に憐憫の眼差しを向けられ、褒?は撫然とする。

だが、事実は事実だ。

褒?の母である三娘^{さんじよ}は大陸一の美女と言われるほどの美の持ち主だ。武を好む彼女は、引き締まつた美しいプロポーションの身体を持ち、しかしその顔立ちは凜々しさよりも可愛らしさが際立つている。緩く流れる薄青の長い髪は絹糸のようで、彼女を女性らしく華麗に彩つっていた。

だが、その娘である褒？は、身体は引き締まっているものの母ほどの美しいプロポーションを持つには至らず、顔は平凡で簡単に雜踏に紛れ込んでしまえるほどだ。その長い髪と瞳はこの国では珍しい漆黒ではあるが、その色を持つ民族、夜郎^{やろう}は人々から恐れ嫌われているためプラスの要素にはなりえない。

絶世の美女であつた母ならば有効な技だつたのだろう。だが、彼女に似ても似つかない褒？ではあの技は武器にはならず、寧ろ自分を傷付ける刃にしかならなかつたようだ。

「むう……正論過ぎて言い返せないのが悔しい」

今更ながらにその事実に気付いた褒？は唸りながら呟いた。
まあ、憐れまれたのは腹立たしいが……。

「ふつ……あはははは…」

褒？は突然の笑い声に驚いて辟方を見ると、何故か彼は腹を抱えて笑っていた。よく見ると田尻に涙が浮かんでいる。

「？」

何故彼がこんなにも大爆笑しているか分からない褒？は眉を寄せて首を傾げた。そんな彼女の様子に気付いた辟方は、肩を震わせながらもなんとか笑いを抑え込み、滲んだ涙を拭いながら乱れた呼吸を整える。

「くく……いや、悪い。まさかあんなことを言われて怒りもせず、それをそのまま認めるとは思わなくてな。流石蹲に名高い“変人姫”

”だけある

褒？は彼の言葉の意味が理解出来ずに困惑した。

「？ なんで怒るの？」
「自尊心が高いから」
「事実なのに？」
「事実だからこゝで笑っているのを認められないんだよ。自尊心の高い奴はな」

冷たい眼差しでせつ吐き捨てた辟方は、嘲笑するように口端を歪ませて嗤つた。だが、意味は分かっても理解出来ない褒？は、納得できるはずもなく、くつきりと皺が出来るほど眉を寄せた。

「……せつの方がよつほど変だと思つんだけど」
「くくく……そつ言い切れる貴族はあまりいないんだよ」

難しそうな顔をして唸つていた褒？は、結局理解することを諦めてぼそりと結論を呴いた。それを聞いた辟方は、目を細めてやつぱり面白いと感し、どこか満足そうに笑つた。

* * *

「一つ提案があるんだが」「何？」

用意されていたお茶を一人で飲んで少し落ち着いた頃に、ぽつりと辟方が問いかけた。茶碗に口を付けていた褒？は、その体勢のまま

視線だけを彼に移して問い合わせる。

「お前との関係についてだ」

「？」

彼の真剣な眼差しに震えは首を傾げつつも、お茶を飲むのを止めて、茶碗を包んでいる両手ごと太股の上に置いた。そんな彼女の動きを見つめながら、辟方は空の茶碗を手の中で弄んでいる。

「この婚姻は基本的には解消出来ん。縁談に全く乗り気ではなかつた俺がこの話を請けたのは、俺にとつて必要だつたからだ。そして、お前もそうだと聞いている」

「え？ 別に私は必要だつたわけじゃないけど？」

震えは当たり前のようになくなってしまった。

その予想外の返答に辟方は言葉に詰まる。しかも微妙に腹立たしい。

「……じゃあ何故この縁談を請けたんだ？」

「父様と母様に絆されたから」

それ以外に請ける理由なんてあるの？ と不思議そうな顔をする震え。

一方、またまた予想外の返答をされた辟方は憮然として口を閉ざした。

……震えにお前には興味がないと言われた気がする。それ以前に、両親以下なんだな、俺。

そう思つたら何だか泣けてくる。何故だ……。

辟方は思わずつきそうになつたため息を何とか飲み込んで、お茶を飲もうと茶碗を傾ける。だが、既に中身は空だつた。どうやら、そんな事も忘れてしまつぐらいには動搖していたらしい。

再び茶碗を手で弄びながら呟いた。

「…………。あー、兎に角乗り気ではなかつたんだな？」

「そう」「

やや疲れた顔で確認した辟方に褒？はあつさりと頷いた。
それを見てほつと安心したように息を吐いた彼は、最低限の条件は
揃つているな、と小声で呟いて頷いている。

「なら、構わん。俺に協力しろ。そうすれば、俺はお前と契らん」

「……それ、拒否権は？」

辟方の様子に嫌な予感がして褒？は思わず訊ね返した。正直、権力
の集中する場になど積極的に関わりたくない。面倒なことになるこ
と請け合いだからだ。

早々に逃げようとする褒？に辟方はにやりと笑つた。

「拒否しても構わんぞ？　ただし、拒否すれば今すぐ契る」

「脅迫？」

「選択肢があるだけいいと思うが？」

全く悪びれる様子のない辟方に褒？は呆れてしまう。まあ、分かり
やすく正面から堂々と言つてくるだけマシか、と取り敢えず話を聞
いてみる。

「否定はしないんだ…… 内容は？」

「囮になつてもらいたい」

「もしかして暗殺者がいっぱい来るの？！」

辟方の言葉を聞いた瞬間、褒？の頭の中で“囮 + 危険 = 暗殺者”と

いう不可思議な式が出来上がった。そして、暗殺者に出会い^{チャンス}機会が

出来ることに鼓動がどくどくと力強く脈打ち始める。

自然と緩む頬を抑えきれず身を乗り出して辟方に訊ねると、彼は

身を引いて顔を引き攣らせていた。

「ま、まあ、いっぱいどうかは分からんが、何人かは来るんじゃ
ないか?」

「やる!..」

褒?は即答で嬉々として引き受けた。

そしてその横では、彼女が受けたにも関わらず、複雑そうな顔をして彼女を見つめている辟方がいた。

初夜（۳）（後書き）

「これで一回終了です。」

少しずつ変人度が上がっていくばかりなあ、と思ってしまいます（笑）

裏？といつ娘（一）（前書き）

辟方視点です。

寝？と云ひ娘（一）

辟方へきばつは寝台の上に座ると深々とため息を付いた。

昨夜は常よりも早く寝たはずなのに、目覚めても何故か疲れていた。

横を見ると、すぴすっぷとおかしな寝息を立てて、無邪氣に眠つてい
る褒ほひし?が見えて無意識に眉を顰める。彼女の寝顔は幼く、これだけ
なら無知な箱入り娘にしか見えない。

だがしかし。

彼女の頭が乗つている枕の下には、実用的な短剣が隠されているの
を辟方は知つていて。といふか、昨夜偶然見つけてしまつた。

皇帝が通う寝室には武器の類が持ち込めないようになつていて。ま
してや彼女は今日後宮に来たばかりで、身元は分かつていても警戒
されている人間だ。持ち物は厳しく検査されるし、今着ている夜着
はこちからで用意した物だから、そこに仕込むことはほぼ不可能だ。
侍女を懐柔すれば持ち込みも可能だろうが、簡単に懐柔できるよう
な者は皇帝や皇后の近くにはいない。

とすれば、自分で持ち込んだことになる。はつきり言つてそんな隙
はない。あるならば、暗殺者が続々と押しかけ、武に長けていない
己の命は当に尽きていただろう。にも関わらず、武器はある。昨夜
の千本然り、枕下の短剣然り。

はつきり言つて彼女が本気でこちらの命を狙つてきたら死ぬ自信が
ある。断言出来ることが果てしなく情けないが……。

しかも彼女は、予想外にも嬉しい告白を大声で叫んでおきながら、自分が押し倒して迫つても顔を赤らめもしなかつた。本当に慣れていないのかと疑問に思うほど動搖は見られず、こちらを真つ直ぐに睨みつけてただただ怒っていた。

なのに、だ。

暗殺者が来ると聞いただけで満面の笑みを浮かべ、頬を赤らめていた。

何なんだ、この差は？

自分は何処の誰とも知れぬ暗殺者以下なのだろうか？

俺、皇帝なのに……。

確かに権力欲のない娘を妻にと所望した。だからと言って、李辟方（りぱいぱう）に全く興味を持つていらない娘の言動は地味に彼を傷付けていた。その傷を、暗殺者（うんしやくしゃ）云々の彼女の表情が見事に抉つていった。

何故こんな娘が己の妻なのだろう？

複雑な心境にくつきりと眉間に皺を刻みながら、辟方は卓の上に避けておいた“花”を掴む。それは、昨夜この室を訪れた際に彼が持つてきた李花（すももののはな）だった。

婚姻の儀の内の一つ、『華連夜』。

花嫁が嫁いで来た初夜から数えて三夜、続けて花嫁の室に花婿が通

う儀式である。

儀式のしきたりで、花婿は部屋を訪れる際に切花を一輪持つていく。翌朝、寝台の上に茎を折った花が置いてあると、それが一人が契り花婿が“花”を手折った証とされる。

因みに、あまり例はないが、契ることが出来なかつた花婿は、持ってきた切花をそのまま持つて帰ることになる。それが“花”を手折れなかつた証となるのだ。

昨夜は結局、二人で話し合つた後に寝？が寝入つてしまつた。独り取り残された辟方は、帰る訳にも行かず、仕方なく同じ寝台に入つて眠つた。

つまり、彼らは契つていないので。とすれば、彼は花をそのまま持つて帰るのがしきたりになる。

しかし。

このまま花を持つて帰るのは、契れなかつたことを公表することに等しい。それは出来ない、と男としての自尊心が邪魔をする。

暫く手に持つた花を見つめたまま迷つていたが、辟方は軽く手に力を込めて茎をしっかりと折ると、それを寝台の上に静かに置いた。

そつと屈んで眠る寝？の顔にかかる髪の毛をそつと横へ除けると、そのまま寝室を後にした。

裏？とこの娘（一）（後書き）

まとめると長かったので、切つました。
続きを読まぬ明田更新します。

裏？と云ふ娘（2）（前書き）

引き続き僻方視点です。

褒?といつ娘(2)

皇帝の私室である通称“龍の間”。

辟方へきほうがそこに戻ると、すぐに側近である孔叔牙こうしゆうががやつて來た。

「お疲れのようですね」

常に笑顔を浮かべ穏やかに佇む彼は、弱冠28歳でありながら国政を統括する天官の大夫になつた実力者だ。彼はその能力を先代皇帝に認められ、10年ほど前から辟方の側近として政務の補佐をしている。

だがそれだけではなく、辟方にとつて叔牙は師であり兄であり友であつた。彼は辟方が心安く共に居られる数少ない人間の内の一人で、その姿を見た辟方は、思わず叔牙を半眼で睨んでしまう。

「……あれはどういう人間だ?」

「あれ、ですか?」

突然の悪態にも全く動搖することなく、綺麗に笑つたまま問い合わせられた辟方は苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

そもそも、辟方が叔牙に褒?のことを訊ねるのは当たり前ののだ。叔牙は夷吾いじやに師事していた過去があり、彼と旧知の仲であることは有名だ。その娘である褒?ともよく顔を合わせており、彼女の友人であると過去に叔牙が話していたのを辟方は覚えている。ならば褒?という娘をよく知る叔牙に話を聞くのは、『ぐごく基本的なことだろう。

そういうふたこちらの意図が分かっているのにも関わらず、敢えて訊ね返す胡散臭い笑顔が憎らしい。

「管褒かんばう? だ」

「皇后様ですか？ それならば以前調査書を奏上いたしましたが？」

「……」

「御覧になつていないのでですね？」

そうだったかと、辟方が表情を変えずに記憶を掘り返していると、叔牙が重ねて問うてきた。その問いは、疑問系でありながら、既に答えを確信している問いかけだった。

「……お前と夷吾の推薦だ。二人のことは信頼している」

むつとしながらも、だから調査書など必要ない、と切って捨てた辟方に叔牙の笑顔が変化する。その顔は確かに笑顔なのに険しく、こちらを責めているようだった。
同じ笑顔なのに……。

「陛下。私共を信頼していただけることは大変ありがたく存じます。しかし、信頼と依存は違います。それは陛下の甘えであり、油断です。皇帝がそのような態度を取つてはなりません」

「……」

明後日の方向を向いて反省する様子のない主に、叔牙ははあとため息をつく。それから彼は抱えていた書簡の一つを差し出してきた。

「以前奏上いたしました管褒かんばう? に関する調査書です」

その言葉に目を見開いた辟方は、慌ててその書簡を受け取り内容を

見る。

「管褒？は家宰ちやくざい、管夷吾の一人娘です。幼い頃は両親と共に各地を旅し、6年前に我が国に居住。それ以後は上流階級の宴に出席しつつも、街の食堂で下働きをしたり、傭兵として隊商の護衛についたりなどと、貴族の姫らしからぬ行動を延々と繰り返し、“変人姫”と呼ばれる現在に至っています」

淡々と補足をしながら説明する叔牙の言葉に、辟方は頭の中に褒？の姿を思い浮かべる。ふと、そこで気になつたことがあつた。

「そういえば外見は両親に全く似ていなーいな。夷吾の祖先に夜郎がいるのか？」

そもそもどうだろ？夷吾は金髪茶目さんぱくさめ、三娘は髪も瞳も薄青さうじょうで、その子供が黒髪黒目になる要素がどこにもない。それに加えて、この世界では身体に黒の色を持つのは夜郎の血をひく者だけであると決まつている。

だからこその辟方の問い合わせであつた。

「いいえ。彼女は養子です」

「養子？」

「はい。夷吾殿は婚姻前に國を出奔していいたので、その事実を知っている者は少ないですが、本人も知っています」

そんな話は聞いたことがない辟方は不可解な顔をして首を傾げる。だが、叔牙が断言するのであればそれは裏付けのある事実なのだろう。

だが、そうなると別の疑問が出てくる。

「ならばあの娘は夜郎なのか？」

「違います。確たる証があるわけではありませんが、夷吾殿がそのことについては断言していました。彼女には夜郎の血の一滴すら入っていないと」

「黒髪黒目で？」

「はい。あの方が断言するのですから、根拠がおありなのでしょう。ただそれを示さないだけで」

叔牙の考えには賛同出来る。

管夷吾という男は有能ではあるが一癖も二癖もある。しかし、祖国を愛する心に嘘はない。なにせその愛する国のために、一度は出奔したこの国に舞い戻ったほどだ。

だからこそ、夷吾は忠誠を誓つた主である辟方に決して嘘はつかない。國の大事が関わっているならば尚更だ。

だとすれば。

何故褒？はあんなにも暗殺者に会えることを喜んでいたのだろう？

「……ふん。夜郎ならばあの態度も頷けるのだがな」

「あの態度？」

「囮になれ、と告げたら暗殺者が来るとはしゃいでいた」

「それは……」

流石の叔牙でもそれは予想外の反応だったのだらう。珍しくも目を開けて絶句していた。

辟方はそんな彼の様子を面白そうに眺めながら笑って問いかける。

「己が夜郎ならばその理由にも納得がいくだらう?」

「……強ちその考えは間違つていなかもしれません」

辟方の問いに暫く何かを考えていた叔牙は、苦笑を浮かべて肯定した。その意味が分からず辟方は目を丸くして先を促す。

「うん?」

「彼女は自分と同じ色を持つ者に興味を持つていました。……それに、彼女は三娘殿に似て強い者が好きなので、単純に会つて戦つてみたいのではないかと」

「戦闘狂いなのか?」

「どう、でしようか。彼女は積極的に喧嘩を売りませんが、売られた喧嘩は必ず買うので」

「……厄介な」

げんなりと呟いた辟方に、叔牙は楽しそうに付け加えた。

「陛下よりも強いですよ。私でも接近戦では敵いません」

「お前は中距離や遠距離の方が得意だらう」

「それでも負けはしませんが勝つことも出来ないでしょう」

「それほどか……ふむ、李周りしづといい勝負が出来るかもしれん」

顎に手を当てて褒?の実力を予想した辟方がぽつりと呟ぐ。しかし、その呟きを聞いた叔牙は困ったように苦笑した。

「李周様がお相手では彼女の負けでしょう」

「何故だ?」

「彼女は武に優れておりますが、智には優れではおりません」

しつと放たれた叔牙の台詞は多分に失礼なものだった。そのあま

りの言い様に辟方は目を見開き、それから盛大に呆れてしまった。

「はつきりと言つな？」

「事実ですか？」

「ふん、覚えておこひつ」

苦笑した辟方を叔牙はじつと観察する。

智に優れるも武に向かない辟方と、武に優れるも智にむかない褒？。二人が協力すれば、互いに足りない部分を補い合つていけるだろう。だからこそ、叔牙は妻として申し分ないだろうと彼女を推したのだ。

そんな叔牙の様子に気付いたのか、辟方は更に苦笑を深めた。
辟方とて分かつてはいるのだ。正面にいる彼が自分のために策を弄していることくらい。

そして、彼女を退けるという選択肢を持つことが許されない以上、今ここで彼女に悪印象を持つことは得策ではないといふことも。

ただ、叔牙は少し思い違いをしていた。といつより、主の性質を忘れていた。

辟方は決して褒？を苦手に思つたわけでも、嫌悪したわけでもなかつた。

彼女のその変人ぶりの片鱗を見て、我慢していたのだ。

彼女を愛でてしまわないよう。

裏？と云う娘（2）（後書き）

徐々に色々な片鱗が見え始めました。

けれどこの時点だと一番ヤバそつなのは辟方な気がする……
おかしいな……、一番ヤバイのは別の人の予定なのに……

一 日常～眞実の欠片と裏？のお願い～

私は特別なものなど何もなこよつた所に住んでいた。少し歩けば田んぼのための水路かわがあって、林や山があつて、肝試しにもつてこいの墓地があつて、幼い私が無邪気に過ごす分にはそれで充分だった。私がいつも遊んでいる遊び場。そこは学校の校庭と一緒になつていて、その広大な土地には鉄棒や運梯はもちろんのこと、カラフルなイヤで作られた馬とび台、同じイヤと土管で作られた山、ブランコ、シーソー、ターザンが出来る滑車などまるでアスレチック公園のようだった。

そこで、私はいつも遊んでいる。近所と言つても歩くと20分程離れている家の3つ上の兄ちゃんとその友達の男の子たちに混じって、鬼ごっこやかくれんぼ、ドロケイ、どんふみなどをして、5時の放送があると家に帰るとこひの繰り返し。

平凡で当たり前の日常が、どれほど幸せであったか、この時にはまだ何も理解わかってしていなかつた。気付けてすらいなかつた。

そして、日常どこのは、突然起る非日常によつて簡単に失つてしまつものであるところとも。

私はいつものようにお兄ちゃんたちと隠れ鬼をしていた。

鬼に見つかりそうになつた私は、全速力でカラータイヤの山を登つてから再び下りて土管を潜る。音が響く土管の中は忍び足で静かに歩き、後を窺いながら進んで外に出ると、そこまでより明るい光が田を刺した。

「え？」

私は立ち止まって呆然と呟く。田の前に広がっていたのは見慣れたタイヤ山ではなく、見たこともないほど高い山々と点在する薄桃や碧の色とつどりの湖、そして大地の変わりに広がる雲海。

「うわあ～！ 何これ！ すゞおーいつ！…」

見たことのない壯麗な景色に田を奪われてそのことしか考えられなくなる。

私はその景色をもつとよく見たくて、棚台になつていて岩の淵に立つた。そこから身を乗り出して下を覗き見ると、自分が今居る場所がどれだけ高いのかが分かつて吃驚する。高層ビルなど全くない場所で育ったため、3階建ての学校の屋上以上に高い場所に上つたこのない私は、そのあまりの高さにゾクゾクして楽しくなってきた。

だがそこに突然風が吹き荒れて、私はそのまま真っ逆さまに落ちそうになつた。慌てて手に力を入れて、落ちそうになる身体を棚台上に引き戻すと、背後に巨大な気配を感じる。さつきまでなかつた気配を不思議に思い、振り返ろうとした私に低い低い声が響いた。

「汝、我が求めに応えし者か？」
「え？」

問いかけの意味が分からなくて私はぱつと振り返つた。田線の先には、其処にあるはずの土管がいつの間にか消えていて、あつたのは登れないほど高い石壁と見たこともないほど巨大な黒い影。その影が口を開いた。

「「Jの地に縁を持たぬ者よ 汝に我が祝福を」とえよ」

その言葉と共に『えられた 痛み。

* * *

勢いよく目を開くと、そこには見知らぬ天井が広がっていた。

褒^{ほひ}?は少し考えて、そこが管家の屋敷ではなく、後宮にある新たな自分の寝室であることを思い出す。

「……私、嫁いだんだった」

久しぶりに視た夢のせいで記憶が混乱していた。

「もうずっと見てなかつたのに……」

ぽつりと呟いた声は、微かに震えていた。

褒?はきつて目を瞑る。するとさつきまで見ていた夢の残像が甦つてきた。無意識にお腹を押さえながら思い出す。

あれは一九二〇年に来た時の記憶だ。まだ管褒?ではなかつた頃の自分。

「14歳にもなつて隠れ鬼で満足とは、私も随分無邪氣だったんだな……いや、こっちだと7歳かな」

以前いた日本という国。それはこの世界 天彌宮^{てんびきゅう}には存在しない。天彌宮に存在する国家は茜、湯、波、炎、兔、貝、象、融の僅か八国、それ以外は少数民族の独立自治領が散らばっているだけ。そし

て、彼女の目の前に広がった世界は日本とは全く違うものだった。

天体、大地、草原、田畠、森、山、何よりも見たことのない建築様式の街、建物、衣服。

その中でも一番の違いは言葉と文字だった。とは言え、こちらに来て既に八年も経っている褒?には問題のない違いだが。

そんなことをつらつらと考えながら、ふと横を見るとそこには誰の姿もない。褒?が手を伸ばして横の布団を触つてみると、其処は冷たくなっていた。

横に寝ていたはずの夫、（へきぱう） 褒方は随分と前に起きて室（へや）を出たようだ。

「ん？」

辟方がいたはずの白い布団の上に鮮やかな色があるのに気付いた褒?は“それ”を持ち上げる。

「李花（すもものはな）……？」

その“花”的意味を知らない褒?は、茎の折れた李花を見て首を傾げた。

「お田覚めになられましたか？」

考えごとをしていたせいで人の気配に気付かなかつた褒?は、反射的に枕の下に手を突つ込みながら声の主を見遣る。そこには見慣れぬ女性が微笑んでいた。

彼女は笑顔で寝台に近づくと、褒?の持つている“花”に気付いてきょとんとした。

「あら？……まあ！ 陛下が皇后様をお待ちになられていたのは

本当だつたのですね！」

「え？」

「ずっと皇后様御一人を一途に想つていらつしゃつたのですね……。

感激ですわ！」

「は？」

両手を合わせてうつとりと呟く彼女を、ついでいけない褒?はぽかんと口を開けて見つめる。

「えつと……？」

確かに彼女は昨日慌しく紹介された人の中にいた気がする。だが、誰だか思い出せない褒?が困ったように聞くと、漸くそんな褒?の様子に気付いた彼女が優雅に礼をした。

「一」の度皇后様付きの第一侍女の任を拝命仕りましたちゃんばいえい陳梅瑛と申します

「宜しくね、梅瑛。覚えてなくてごめんなさい」

「いいえ！ お気になさらいで下さい！ 昨日は慌しくてきちんとじご挨拶出来ませんでしたから」「そう言って貰えると助かるわ

褒?がにっこりと笑つて言つと、何故か梅瑛はうつとりとして頬に手を当てた。何故そんな反応をされるのか分からなくて訝しげに彼女を見ていると、彼女の瞳がじんわりと潤んでくる。益々不可解な彼女の反応に訳も分からず寒気がした。

「ど、どうしたの？」

動搖して少しどもつづつ、褒?が問いかけると、ぱっと瞳を輝かせ

た梅瑛が膝をつき、がしつと褒?の手を両手でしつかりと握つて訴えた。

「わたくし 嬉しいんです！ 陛下の長の想い人が皇后様のようには臣にも心を碎いて下さる方で！ 今まで乗り込んできたのは愚かで醜いお馬鹿さんばかりで……。また欲に目の眩んだお馬鹿さんが来たら、今度こそ私たちの手で！ と気を揉んでおりました。しかし、それは無用の心配でしたわ。何より皇后様は陛下がお選びになられた唯一人の御方……。その皇后様ならば私たちも心よりお仕え出来ますわ！」

「……よく分からぬけど、梅瑛は面白いね」

キラキラと瞳を輝かせて見つめてくる梅瑛に、褒?はゆっくりと笑つた。梅瑛はその言葉と笑顔を見て、感極まつたように目に涙を溜めるも、それを零すことはない。それを見て褒?は何故あんなにも溜まつている涙が流れないのでどうとよく分からぬことを考える。

「ああ！ 皇后様！」

すると何故か叫ばれた。

訳が分からぬながらも、あのテンションについていきたくない褒?は、それを今追求するのは諦めて昨日から思つていたことを口にした。

「梅瑛、私のことは褒?と呼んで？」

「そんな！ それは光榮至極に存じますが、恐れ多いことですわー！」

後宮といつ場でこんなことを言つるのは決して誰かのためなどではなく、ただの我が儘だらう。だが、これから自分の傍にいてくれる梅瑛には“皇后”といつ号ではなく自分の名を呼んで欲しかった。

梅瑛がこのお願い拒否するのは正しい判断だと分かっている。だからといって褒?には命令する気もなかつた。それでは意味がないのだ。

この件について褒?は全く折れる気がない。その想いを込めてじつと梅瑛を見つめて重ねてお願いする。

「私からのお願いよ」

「……畏まりましたわ、褒?様」

「ありがとう」

暫くの間、褒?の目を申し訳なさそうに見返していた梅瑛だが、相手に折れる気配がないことを悟つた彼女は、降参して困つたように笑つて頷いた。その笑顔に、褒?は嬉しそうに微笑み返した。

I | 田中 ～眞実の欠片と裏？のお願い～（後書き）

遅くなりましたが、無事更新出来て良かつたです。

今回の話は一つに分ける予定だったのですが、中途半端だったのでも
1話にまとめました。

そのため通常より少し長くなってしまった。
すみません。

ここから色々と始動する予定なので、どんどん楽しくなる、はず（
笑）
どうかお楽しみに～

軽く朝餉を食べた後、褒？は梅瑛に容赦なく飾り立てられた。

豪奢に飾り付けられるのが嫌いな褒？は、しかしこれも皇后の務めの一つと自分に言い聞かせて我慢した はずが、さつきからボロボロと本音が零れ落ちている。

「じゃらじらと邪魔臭い……頑丈じゃないから武器にも使えないし布が多くすぎて動きづらいしこんなにヒラヒラさせなくても綺麗に見せることならいくらでも出来るじゃない」

本人は内心で呟いているつもりなのだろうが、小さくではあつたが確実に音になっていた。それを聞いてしまった梅瑛は、流石に目を丸くする。

“変人姫”と称される元となつた噂の数々は知つていた。だが噂といつものは往々にして尾鱗が付くもので、梅瑛としては、それは権力者的情報操作の一つという認識をしている。ましてやその姫が家宰である管家の一人娘であれば、父親の権威の失墜を望む数多の輩が積極的に悪意ある噂を流すだろう。だから梅瑛は端から噂を信じていなかつた。どうせちょっととした失敗を適当に大きくしたものだろうと。

しかし、その考えはどうやら正しくはなかつたようだ。自分は彼女のことを少々見誤つていたらしい。

そんなことを考えられているとは知らない褒？は、尚もぶつぶつと小声で毒を吐き続けていた。

「失礼致します」

「どうぞ」

と其処に、落ち着いた温かさの感じられる声が響いて、室^{くや}に一人の女性が入つて來た。白髪交じりの髪をきりと結い上げ、立ち姿の美しいその女性は、褒?の前で立ち止まるときれいな顔立ちである。その礼はとても自然で、華やかさは感じられないが、今まで見た誰の礼よりも美しかつた。

「お初に御目文字仕ります。私は後宮女官長の任を拝しております
鄭小瑛^{ていしょうえい}と申します。昨日^{きのよ}は御挨拶も申し上げられずに大変失礼致しました」

その隙のない身のこなしに見惚れて褒?の口許が綻ぶ。

「これから宜しくね、小瑛。それから、私は気にしてないわ。貴女が陛下についているのは知っているもの。私には梅瑛がいるから、小瑛には陛下を第一にお願いするわ」

「お心遣い、感謝致します」

褒?が言外に滲ませた「自分への気遣いは無用」という意味を正しく汲み取つた小瑛に、褒?は満足げに頷く。それを確認してから小瑛が梅瑛に向き直ると、彼女は上官に対する礼をした。

「皇后様の御準備、滞りなく調つております」

「そう。……皇后様、本日の公務の御説明を致します。婚姻の儀の一日前である本日は、これから王宮前広場にて“民許の賜り”の儀を執り行います。その後、陛下と共に大宗廟に詣でて頂き、王宮に戻つていらしたらそれで本日の公務は終了になります」

「貴女の心遣いに感謝するわ」

梅瑛の報告に軽く頷いた後、淡々と今日の予定を説明した小瑛を褒め？は労つた。それに返礼をして応えた小瑛は、「それでは」と言つて褒め？を促してしづしづと室を出て行く。その後に、少し歩きづらそうにしながら褒め？が続いた。

＊＊＊

茜国^{せん}の王宮は“玉橙宮”^{ぎょくくわいゆう}と呼ばれている。国の国色である橙の屋根と、國の特産物である玉を、王宮の要である玉座と誓言の間の国章の壁に使つてゐることからそう呼ばれるよくなつた。

そして、この王宮には他国^{ほかのくに}の王宮とは違つ特徴^{とくちょう}がある。それが王宮広場を見渡せる“円舞台”と呼ばれる場所だ。

茜国^{せん}がある大大陸^{だいたいりく}。其処にある他の三国では皇帝は雲上の存在で民草の前にその姿を晒すことはない。

しかし、唯一茜国だけは違つた。

初代茜国皇帝 始まりの皇帝として臣民から敬愛の念を込めて“橙祖帝”と呼ばれている は皇帝位に就いてから、民と交わる機会がないことに不満を抱き、民との繋がりの場を求めた。その結果、王宮に後から造られたのが玉橙宮の円舞台だ。

なるべく多くの人を集められるよう造られた広大なスペースの王宮前広場。その何処からでも見えるよう設計された円舞台は、國の儀礼や祭事によく利用され、その都度民は皇帝や皇族の姿を垣間見ることが出来る。言い換えれば、その機会にしか見られないのだが、それ故に数少ないその機会には広場に民が殺到し熱狂するのが茜国^{せん}の常だつた。だからこそ茜国では、皇帝は雲上の人ではあるが、畏

敬の念を抱く相手ではなく、敬愛の念を抱く相手であるのだ。

そんな円舞台に続く道に繋がっている小室 通称“前室”^{へきぼう} に
褒?が入ると、そこには既に嘉礼服を隙なく着込んだ辟方が待っていた。

堂々としたその立ち姿に「うん」と一つ頷いた褒?。その後で梅瑛
がほうっと感嘆を漏らす。
どうやら見惚れているらしい彼女に苦笑していると、外を眺めてい
た辟方がこちらを振り向いた。

「早いね？ 仕事してたんじゃないの？」

彼に歩み寄りながら褒?がそう言うと、辟方が驚いたように軽く目
を見開いていた。その反応の意味が分からなかつた褒?はきょとん
として辟方を見つめる。

と、彼の横に立つていた叔牙^{じゅくが}も表情こそいつもの笑顔だったがア然
としている気配がした。

更に首を傾げた褒?がちらつと後を振り返ると、目を丸くしている
小瑛とはつきりと驚愕している梅瑛が見える。褒?の視線に気付い
た小瑛は、すぐに取り繕つて微笑んだが梅瑛は未だに口を開けて驚
いている。

思わず眉を寄せて再び視線を辟方に戻すと、彼は何故か可笑しなも
のでも見たように笑つていた。

「そつちこそ遅かったな？」
「質問に質問で返さないでくれる？」

それでも辟方に普通に話しかけられたので、褒?は素直に反論した。
とは言え、皆の訳の分からぬ反応と辟方の返答に不満が溜まつて

いた褒？は、ぶすつとした顔で辟方を睨んでいたが。

そんな褒？の様子には一向に頓着せず、不敵な笑いを浮かべた辟方は話を進める。

「まあな。それで？」

「答える気はないわけね。なら私も答えない」

「はあ？」

「何か文句でも？」

「つはははは。子供みたいな拗ね方だな？」

「うるさい」

「はは……俺は、朝の仕事が思いの外早く終わったんだよ」

こんなことで拗ねるなんて意外と子供っぽいな、と思いながらも段々と据わっていく褒？の目に、これ以上からかい続けるのは不味い、と読み取った辟方は漸くからかうのを止めて先ほどの褒？の問い合わせた。

しかし、既に機嫌を損ねていた褒？はそこで素直に答えられるほど大人ではない。そっぽを向いたまま頑なに口を噤んでいると、堪えるような小さな笑い声が聞こえた。

それを聞き咎めた褒？は、声の主をムツと睨みつける。すると、その視線に気付いた辟方は、笑いながらも次はそつちの番だと、田で促した。

それで少し冷静を取り戻した褒？は、室内に生暖かい空気が漂っているのに気付いた。自分達を侍女たちが微笑ましく見守っている。そこで褒？は先ほどまでの遣り取りがいかに子供っぽいかに気付いてしまった。あまりの恥ずかしさに、カツと頬に血が上る。流石に決まりが悪くて、俯いて視線を辟方から逸らしつづぼそぼそと小さな声で呴いて答えた。

「……私の呼び方で、少々お願ひをしてて」

「……」と答え始めた褒？を辟方は微笑ましく見守っていたが、彼女の答えは彼の予想したものとは違っていたので思わず問い返してしまった。

「呼び方？ それだけ？」

「他に何かあるの？」

そんな彼に褒？は不審そうな視線を向ける。その視線に少し怯みつつも、辟方は好奇心に負けて聞いてしまった。

「……李の花はどうした？」

「ああ、あれ、辟方が置いていったの？」

褒？が辟方の名前を気軽に呼んだことに、侍女二人がまた驚いた。小瑛は驚いたまま「花……」と小さく呟いている。どうやら彼女は花のことを知らなかつたらしい。

大きな驚きの中にいる侍女たちとは対照的に、叔牙は一人可笑しそうにクスクス笑っていた。

そして辟方はそんな外野を無視して話を進める。

「まあな」

「ふーん、それなら昨夜直接渡してくれればよかつたのに
……」

辟方に習つて褒？も外野を無視して軽く相槌を打つた。

すると、辟方がぽかんと目を見開いている。はつきり言つてマヌケ面だった。折角きつちり着込んでいるのにそのマヌケ面のせいで総てが台無しになつてている。

それ故に彼の驚きが大きいことを示されて、そんなに驚かれる覚え

のない褒？はきょとんとしてしまひ。

褒？が周りを見回してみると、皆がア然と褒？を見ていた。またもや理由の分からぬ皆の反応に苛々が積もる。これではまるで自分が無知だと言つていいようではないか。

そんな彼女に気を取り直した辟方が躊躇いがちに訊ねた。

「お前……華連夜がどういう儀式か知ってるか？」

「馬鹿にしてるの？ 初夜の性交ことでしょ？」

「いや、まあ、そうだが……」

そんなことを聞かれるとは思つていなかつた褒？は心外だと辟方を睨みつけ、早口に言い募る。

怒りも露に直接的な言葉で答えた褒？に辟方の口元が引き攣つた。それに気付かないのか褒？は彼を睨みつけたまま捲くし立てる。

「それを三夜連続でやるのが華連夜でしょ？ それ位ちゃんと父様

が教えてくれたわよ」

「……夷吾の仕業か」

片手で皿を覆い、小さく呻いた辟方。

その呴きで大まかの事情を察した小瑛と梅瑛、そして大体の事情を把握していた叔牙。その三人の脳内にこやかに笑う夷吾の姿が浮かんだ。

前室に奇妙な雰囲気が流れる。

それを破つたのは、叔牙だった。彼は困つたように苦笑すると、褒？に説明してくれる。

「皇后様、華連夜の儀式では夫婦が契つた証として、翌朝に男が花

を置いていくんですよ

「は？」

「新婦を花に見立てて、その花を手折った証として茎を折った花を置いていくんです」

「何で？」

「まあ、周りに判るよつにするために、ですね」

「?? ジャあ何で今朝花が置いてあつたわけ？」

「……」

流石の叔牙でも其処は言葉にはしなかつた。その代わりに、ここにここにこと笑顔を向けられる。

その意味に気付いた褒？は目を丸くして慌てた。ぱつと振り返ると、小瑛には微笑みながら軽く礼をされ、梅瑛には感激で輝かせた瞳でじつと見つめられた上に、合わせていた両手をサムズアップされた。貴族のお嬢様なのにそんな平民の仕草をよく知っているな、と褒？はつい関係ないことを考えてしまつ。

しかし、そやつて現実逃避しても事実はひとつだ。ぐりんひとつ首を勢いよく回すと、辟方を睨みつけながら彼に詰め寄つた。

「ちょっとどうこうこと?...!」

褒？は声を荒げて問い合わせただとした。

しかしタイミング悪く前室に春官が入ってきて、時間が来たことを告げられる。流石に知らない官吏の前で皇帝を問い合わせにもちかず、褒？は言葉を飲み込んだ。

すると、辟方がやりと笑つて手を差し伸べてくる。褒？は眉を寄せて厭そうにその手を見つめると、仕方なくそこに手を重ねた。

そして、前室を出て円舞台に続く道を一人一緒に歩き出した。

I | 四四三～前室～（後書き）

今回せよひとつと申めます。

といつか、書いてて思つたんですが。
こんな遣り取りばかりして本当に惚れられるんか?
ちょっと疑問に思つてしましました。

はははは。

幕間 突きつけられた条件1（前書き）

本編が始まる前の話です。

幕間 突きつけられた条件1

「陛下、聞いていますか？」

「あ？ 聞いてない」

主^{あるじ}であり、この国の皇帝である李辟方^{りへきはく}の気の抜けた返事に、此方の力も抜けてしまいそうになる。

今、この皇帝の執務室には側近である孔叔牙^{こうしゅうが}しかいないのでいいものを、こんな姿は諸宮には見せられない。大事な忠臣を失い、隙を窺つている奸臣に好機を与えてしまいそうだ。

ただ、その気持ちも分からなくはないので、諫める^{けんめい}ことはせずに苦笑するに留めた。

「これ以上后位を空けておくわけには参りません。それについては私も冢宰^{ちゅうざい}に賛同します」

「分かつていてる。……が、憂鬱なことに変わりはない」

健全な青年である主^{きみ}が、女性を忌避するほど嫌がる様に同情を禁じえず、叔牙はつい期待させるようなことを囁^{ささや}いてしまう。

「しかし、今までの方たちとは違うと思^{おも}いますよ」

「そう言えばお前は相手の女を知^しっているんだつたな」

「ええ。少し変わっていますが、面白い方ですよ?」

「それは褒め言葉か?」

呆れたように聞いてきた辟方に微笑みつつ頷いた。だが、叔牙の言葉に興味を持つた様子は全くなく、まだ嫌そうに眉を顰めている。とはいえる、問答無用で拒む様子はないので一応は納得しているらしく

い。本気で嫌ならば、これまでのよつと誰が何を言つても聞く耳を持たないからだ。

(流石に冢宰の泣き落とは効いたようですね……)

「冢宰である管夷吾かんごうも、今まで決して表に出すことはなかつた愛娘を推薦することで身を切つてゐる。その覚悟が、結婚はしないとまで言い張つていった辟方を説得したのだ。

「そう言えば、冢宰から文が届いております」

「何だ?」

主に促されてそれを開いて読むと、叔牙は思いつきり眉を顰めた。側近の珍しい様子に辟方が怪訝な顔をする。

文を読み終えた叔牙は少し困つたように笑いながら、それを辟方に差し出した。滅多に変わらない側近の表情を変えた文に何が書かれているのか、むくむくと好奇心が湧き、それを受け取るといそいそと読んだ。

曰く

初めまして、陛下。この度縁談相手になつてしまひました管褒かんばうじ?と申します。

この結婚を承諾するにあたつていくつか条件を付けさせていただきます。

一つ、護衛は必要ありません。邪魔です。

一つ、定期的に休暇をいただきます。

一つ、私の奇行には目を瞑つて下さい。

一つ、性交の際には必ず目隠しをしていただきます。

以上のことを踏まえた上で話を進めて下さい。承諾出来ない事項が

ありましたなら、父、管夷吾と相談なさつて下さい。私の意向は全て父に伝えてあります。

本題だけですが、これで失礼致します。

管夷吾？

「お変わりないようですね」

この文を読んでそんな感想を言った叔牙に、辟方は思い切り呆れた。

「なんなんだ、色氣も素氣もない」この文は？ まるで男が書いたみたいじやないか。しかも、護衛は邪魔だと休暇をよこせとか。あまつさえ、奇行をすることは決定なのか？ 加えて、これはなんだ？ 貴族の子女が性交の方法を堂々と要求するな！」

常識を知る者としては当然の疑問であり、反応である。だが、彼女の奇行を知る叔牙からすると、理解は出来ないまでもそれほど驚くことではなかった。

（流石に四つ田の条件には驚きましたが……他は概ね想定の範囲内ですね。とは言え、ここまで直接的に要求していくとは思いませんでしたが……）

文を読んで、理解出来ないといつ顔をして悩んでいる主を見守りながらそんなことを思つていた。

考え込んでいた辟方は自分なりの答えを見つけて、叔牙に問う。

「これは遠回しに縁談が嫌だという意思表示か？」

「いえ……嫌なはつきりと断るでしょう。承諾すると明記している以上、納得なさっていると思いますよ」

「ではこれは本気で本人が望んで書いたのか？」

「おそらくは」

「……そんな変人と俺は結婚するのか？」

そんな咳きに叔牙は言葉を詰まらせた。その言葉が眞実である以上、何を言つても空しいだけだ。

その先では、辟方が困惑しつつも密かにショックを受けていた。心の声が漏れでいる。

「いくら婚姻が自由にならないとはいっても、俺は変態を娶るのか……

？」

予想以上に沈んでいる様子に、叔牙は氣を紛らわせるように微笑んで言った。

「しかし彼女が権力にも財力にも興味がないのは事実ですよ。それに陛下の嫌いな媚びるタイプの女性でもありません」

「生理的に無理でなければそれでいいのか？　どれだけ妥協せねばならないんだ……」

良い面を見せて励まそうとした日論見は見事に外れ、彼は余計にシヨツクを受けてしまった。こうなると何を言つても逆効果になる気がして叔牙は苦笑する他なかつた。

幕間 突きつけられた条件1（後書き）

王様つて可哀想な人種ですよね。

自分で書いといてなんですが、つくづくそう思います。

幕間 突きつけられた条件2（前書き）

幕間の続きをです。

幕間 突きつけられた条件2

翌日。

朝議が終わり、執務室にこもつて仕事に励む辟方と叔父の元に冢宰である管夷吾がやって来た。

「おはようございます、陛下」

にこにこと笑顔で礼をする彼を、辟方は胡散臭そうに眺める。

そもそも冢宰は百官の長であり、官吏の頂点に立つ者だ。欲望渦巻く富廷で見事その地位を勝ち取り、何事もないかのように立ち回っている彼は徒者ではない。

正直、辟方には曲しかないように見える。

富廷で育ち、次期皇帝として、人々の欲望と思惑の中で生きてきた辟方は人の心の機微には敏い。だから、何か企んでいる者がいれば、その何かは分からずとも企んでいることくらいは分かる。けれど、夷吾に関しては腹の内が全く読めないので。裏があるのか、企みがあるのか、それすら分からない。気取らせない。

政事に関して、夷吾が自分の味方であること、自分を支持していることを疑うことはない。それだけの信頼は築いている。

だが、もつとレベルの低い問題になると一気に怪しくなる。

夷吾は何事も楽しむ癖がある。そして、性質が悪いことにそのための努力を惜しまないのだ。

そのせいで散々遊ばれてきた。だからこそ、どこかにアラがないか探してしまつ。

「そんな田で見てどうかなれましたか？」

のほほんとすっとぼける夷吾に、ビキッと音を立てて青筋が浮かんだ。いつもながら人の神経を逆なでする腹の立つ男である。

そんな二人の様子には慣れている叔牙は、淡々と自分の仕事をこなしていた。叔牙は自分の敵わない相手に無闇に突っ込むほど愚かではない。夷吾のことを辟方よりもよく知る彼は、こういう場では沈黙をもつて見守るのが常だった。

「文を読んだ。お前の娘からのだ」

「あの子は文を書くのが苦手なのです。しかし陛下のために頑張つたのですよ」

初々しくて可愛い娘でしょう？　とにかく聞いてくる彼に辟方の口元が引き攣る。今まで彼の親馬鹿な発言を聞いたことがないわけではないが、ここまでとは思わなかつた。

「どこがだ！　何なんだ？　あの男らしい文は？」

「陛下はお忙しいですから、時間を取らないようつと氣を利かせたのですよ」

健気でしょう？　と本気で感激している様子の夷吾に、ついに頭が壊れたかと本気で思つてしまつ。

しかし彼のその様子で後の展開が読めてしまい、辟方は憮然とした。だが、何も言わないままでは気が済まない辟方は、目を据わらせながらも文句と疑問を口にする。

「……。護衛が邪魔だと書いてあつたぞ？」

「国ための兵ですから、自分に付いてもううのが申し訳なかつた

ようです。それに妻の教えである子も身を守る術を持つていますか

ら」

「休暇が欲しいと書いてあつたが?」

「親思いの子で私たちに会えないのは寂しいと言つてくれるのですよ」

「奇行に田を瞑れと?」

「自分が箱入りであることを知っていますから。何かおかしな振る舞いをしてしまうかもしないこと不安なのです」

「……性交の際に田隠しをしろと書いてあるのははどう説明する気だ?」

「あの子は恥ずかしがり屋として、陛下に見られるのが恥ずかしくてそんな条件をつけたのですよ」

「本当の恥ずかしがり屋は堂々と性交の方法など要求して来ん!!--」

「ここに」と笑顔で娘を 強引に 優める夷吾に辟方が吼えるも、全く堪えていない。それどころか何故可愛さが分からぬのか、と不思議そうな顔をされてしまう。

流石にいたたまれなくなつた叔牙が、ややぐつたりとしている辟方を庇い、話を進める。

「夷吾殿、褒?様が提示なさつた条件のいくつかは承諾しかねます」「護衛は少数の精銳をつければ事足りるでしょう。休暇は無理を押し通して作る必要はありません。ただ、休める時間が欲しいことを陛下にご承知いただいていればそれで構いません」

話が進んだことで夷吾はふざけていた父親の顔を改めて、真剣な官吏としての顔で言った。相変わらずの素早い切り替えに感心しつつも、辟方は承諾の意を示すために軽く頷く。

「奇行については慣れていただくしかありません。普段の生活に支

障をきたすようなことはないと思いますが……」

「そこはどうしても田を瞑る方向に向かうのか？」

少々呆れ気味に問う辟方に、真剣な顔のまま夷吾は頷いた。

「褒？は育つた環境が特殊なため、私たちとは異なる価値観を持っています。以前よりは馴染みましたが、完全ではありません」「特殊な環境？」

「はい。何れ表面上は上手く振舞えるようになるかもしれません。ですが、はつきり言って今の上流階級には馴染めないでしょう」仕事時の夷吾らしくない言い様に辟方は怪訝な顔を向ける。また自分を試すつもりなのかと睨みつけるが、彼は顔色を変えることなく真剣な目をしたままだった。

彼の真意を汲み取れなかつた辟方は、取り敢えず思いついたまま問うて見る。

「旅をしていたからか？」

「それもあります」

「……詳しく述べぬ理由わけでもあるのか？」

「いいえ。ですが、それは関係ないのですよ」

あまりにも素つ気ない返答に、隠じごとがあるのかと問い合わせめる。すると、あっさりと予想外の言葉が返ってきた。

珍しく苦笑している夷吾に辟方は困惑する。

「関係ない？」

「はい。どんな理由があろうとも、あの子が私たちの可愛い娘であることに変わりはありませんから」

またしても夷吾らしくない言葉だつた。と嘆つか、それはただの親馬鹿発言だつ。

しかし、清々しく笑つて返された答えに思わず納得してしまい、毒氣を抜かれてしまつた。

そんな辟方ににっこりと微笑んでから、夷吾は少し哀しそうに付け足した。

「それにあの子はあまり過去については語りたがりません」

「何か、悪い思い出でもあるのか？」

「それについては何とも。ですから、無理に聞き出せうとしないで下さいね？」

夷吾の悲哀に満ちた微笑みに釣られて、うつかり褒？の過去に同情してしまつた辟方が思わず聞き返すと、それはそれは綺麗な笑顔でずつしりと釘を刺された。

彼の思惑に乗つてしまつたことに気付いた辟方は小さく舌打ちしつつも、頷いた。

「覚えておこひ」

「……何やら瞳が輝いておりますが？」

「むつ」

どうやら辟方の魂胆はすっかりバレていたらしい。小さく呻きつつも、未だに確約を口にしない彼に、夷吾が笑顔で凄んできた。

その笑みが逆に恐怖を引き立て、流石に恐ろしくなつた辟方は仕方なさそうに約束する。その返事に満足した夷吾は凄んでいた顔を元に戻し、それを見た辟方はほつと安堵の息をついた。

二人の対決に決着が付いたのを見計らつて叔牙が声をかける。

「陛下、最後の条件についてお詫ねしなくて宜しいのですか?」

「そうだった。あれは

「

「最後の条件に関しては、一切の譲歩をする気がない」とのことです」

辟方の言葉を遮つて、夷吾がきつぱりと言つて切つた。

「あれが最重要条件で、あの条件を飲んでいただけないのならば、他の条件を飲んで下さつても婚姻に承諾は出来ないと」

続けて述べられた言葉に、辟方と叔牙は絶句してしまつ。

一番どうでもよさそうな条件が最も大事で絶対だ、などとのたまう
褒?もそつだが、それを是として聞き入れた夷吾にも驚きを隠せない。

「
……」

言葉が出ない二人は、どちらからともなく互いに目を合わせる。その表情を見やるに、お互にどうも同じ様なことを感じていふようだつた。

辟方は一度俯くと表情が見えないまま小さく呻いた。

「そんなに田隠し行為^{ブレイ}がいいのか……」

「陛下……」

またもや落ち込んでしまつたのかと思ったが、かける言葉が見つか
らない叔牙は氣の毒そうに呟いた。

しかし、俯けていた顔をゆっくりと上げた辟方の唇は面白やうに弧
を描いていた。

「ここまでくると面白いな」

「は？」

「うむ、そうだ。よく考えると面白い。そこまで言つのなら期待に応えてやらねば。それに、そんな娘ならば当分は退屈せずに済みそうだ」

その意見には全く賛同出来なかつた。しかし、懸命にも叔牙はそれを表には出さずに苦笑する。

その一方で、すっかり褒？に興味を持つてしまつた辟方を、夷吾が複雑そうな顔で眺めていた。だが、すぐに気を取り直したのか、満足そうににこにこと笑う。

そんな夷吾の様子に、二人は全く気付かなかつた。

幕間 突きつけられた条件2（後書き）

父様、ナイス親馬鹿です！ 流石ですよ！

ずっとこの親馬鹿具合を書きたかったんです。
垂れ流せてよかったです

そして。

可哀想な旦那様はしかしこれくらいではめげないので応援してやつ
て下さい。

ははは。
報われるのはこいつのことだらけ……（笑）

一四日目 ～民許の賜り～

蒼天の空がどこまでも広がっていた。雲一つない空に太陽が燦燦と輝き、人々を祝福している。

その空模様は、まるで今日の儀式を、その中心である一人を天が祝福しているようで、集まつた人々は皆期待と喜びに心を震わせていた。

人々の視線の先、玉橙宮円舞台の後方に、手に手を取り合つて歩む仲睦まじそうな男女が現れると、人々は示し合わせたように歓声を上げる。

その歓声の大きさに驚いたように足を止めた娘。彼女の異変に気付き、同じように足を止めて娘を振り返り、微笑んで何かを呟く男。彼が繋いでいた手とは反対の手で彼女の手を優しく撫でると、二人は再び歩き出した。

そして、円舞台の中央に立つと二人は手を繋いだままそれぞれ片手を上げて人々の歓声に応える。

花嫁としてやつて来た娘の初々しいその姿に。

娘を優しく気遣い、導く男のその姿に。

何より二人が仲睦まじく寄り添うその姿に。

人々は明るい未来を予感させた。

自分たちの歓声に応えてくれた一人の姿に、自分たちの声が届いているという現実に、喜び勇む人々は再び歓声を上げる。

その合唱はまるで地面を揺らすようで、空を突き抜けて天にも届く

だらうと人々が感じるほどだった。

「すごい、ね」

パチパチと目を瞬かせる。

褒？は実感していた。これがこの国の民なのだと。皇帝である辟方へきぱうが、そしてこれから皇后として褒？が背負つていく生命いのちたち。

知識として知っているのと、実際の現実としての実感は別物だ。

目の前に広がる人の海。彼らかれら上げる声は紛れもなく希望と喜びに満ちていた。

それは皇家への期待と信頼の証だ。

褒？の身体に震えが走つて思わず足を止めてしまう。漸く実感した國という重み、それは今まで感じたことのないほどの重責で、精神じしんも身体も萎縮してしまい竦みあがっていた。

褒？を掴んでいる手が後ろに引っ張られ、辟方は一步先に進んだ所で立ち止まる。彼女が立ち止まつたために手を後に引かれたことに気付いた辟方は、後ろを振り返ると目を丸くした。

彼の視線の先には、見たことのない表情かおをして自分を見上げる褒？の姿があつた。よく見ると、褒？の瞳が困惑と不安と恐怖に揺れて潤んでいる。

それは、昨日から辟方に對峙していた褒？からは想像出来ないほど弱々しい姿だった。まるで迷子になつた幼子のような彼女の姿に、

辟方は場違いながらも彼女を置き去りにして思つ存分愛でたくなつた。

自分の思考の、彼女を愛でる方向への傾き具合に危機感を覚えつつ、その欲望を理性で抑え付け、辟方は褒？に囁く。

「怖気づいたか？」

挑発するようなその言葉に流石にむつとした褒？が目だけで辟方を睨む。それでもその視線は昨日の射るような圧迫感のあるものではなく、寧ろどこか縮るよつた眼差しに見えた。

辟方としてはそつやつて怖気づく姿には好感が持てる。それを大衆の面前で表に出してしまつては未熟さはあるものの、皇后位に就く恐怖を感じるのは自分のパートナーとして望ましい。

だが、そこで怖気づいて終わるような人間では困るのだ。そんな人間ではこの先共に生きていけない。

もし、褒？がそんな人間ならば、これから彼女との関係を考え直さなくてはならなくなる。今更この婚姻を白紙には戻せないが、結婚さえしてしまえば彼女をどうにかする方法などいくらでもあるのだから。そう思いながらも褒？を気に入り始めている辟方はまだそれ（・・）を実行する気は全くないのだが。

辟方は一から十まで褒？を助けるつもりはない。だが、この場でこのままという訳にもいかず、取り敢えずは彼女の気を落ち着けるにはどうすればいいかと考えて、ふと彼女の手が小さく震えているのが目に入った。

いや、手だけではない。全身が震えていた。

それを見て、辟方は反射的に繋いでいなかつた右手を彼女の手に重ねると、優しく撫でた。

彼の突然の行為に驚いた褒？が辟方を見上げると、思いがけず優しい眼差しで自分を見ている彼に気付いてドキッとする。それと同時に、冷たくなつていた褒？の指先に辟方の指が優しく触れて、まるで彼の熱が移つたかのように温かくなつた。

たつたそれだけのことで褒？の震えは止まつていた。自分の手を見てそれを確認すると、辟方を見上げてゆつくりと微笑んだ。

自然に笑んだ褒？の顔を見て、辟方は満足そうに微笑み返し、再び前を向いて二人一緒に歩き出す。

そして到着した円舞台の中央で、彼らは割れんばかりの歓声に微笑みながら応えたのだった。

それから三十分。

途切れることのない歓声に、若き皇帝夫妻は終始笑顔で応え続けた。

「

背後で名を呼ばれた気がして辟方がちらつと背後を盗み見ると、いつまで経っても戻つてこない一人に焦れたのか、春官が国民には見えない位置から焦つたように手を振っているのが見えた。

その春官に向かつて軽く頷くと、握っている褒？の手に少し力を入れてこちらへの注意を促す。

「戻るの？」

「ああ」

前を向いて手を振つたまま小声で聞いてきた褒？はとっくに背後のか眷官に気付いていたらしい。確認するように聞かれた問いに、辟方は小さく頷いた。

二人は横目で目を合わせると、円舞台上で国民に優雅に礼をし、再びの歓声が轟く中、円舞台から前室に向かつてゅっくりと歩き出した。

「さつきはありがと」

円舞台から充分に遠ざかつてから、褒？は辟方を見上げて微笑んだ。まさか自分があの場面で竦んでしまうなど考えてもいなかつた。周囲の人間もハラハラしただろうが、その変調に一番驚いたのは褒？自身だ。

儘^{まへ}ならない自分自身に困惑して頭が真っ白になり、徒^{いたずら}に焦るばかり。そんな褒？を落ち着かせてくれたのは辟方の言葉だ。彼の言葉が褒？を正気に戻し、そして彼の温もりが褒？に勇氣を与えてくれた。それを思い出すと自然と褒？の胸がほっこりと温まり、笑みが浮かんでくる。

辟方はその花のような笑みに思わず見惚れた。鼓動が速くなつていくのが分かつて無意識に焦つてしまつ。

空回る思考のせいで彼女の言葉に何と答えていいのか分からず、辟方はぎこちなく頷いて応えた。

それを見てにっこりと笑つた褒？は再び前を向いて歩き出す。

辟方は褒？の隣を歩きながら、その笑顔を見て円舞台前で見た彼女の笑みを思い出した。それはまるで固い薔薇がゆっくりと花開く瞬間を見ているかのようだつた。

普段の彼女は特別美しいと言える容姿をしていない。漆黒の髪と瞳は珍しいが、どちらかと言えば十人並みと称されるだらう平凡な顔立ちをしている。

しかし、先ほど鮮やかに微笑んだ彼女はとても魅力的だつた。自然と目が惹き付けられ、はつきりと彼の心に刻み付いた笑み。それを思うだけで何とも言えない疼きが彼の内に生まれて、苦笑する。

「こんなつもりじゃなかつたんだがな……」

辟方の呟きは歓声に搔き消されて、誰に届くことなくただ風に攪われていった。

そんな二人を前室から温かく見守る三つの影。

「素敵……！ とってもお似合いですわ！ ていうか、小瑛様！ 何ですかあれ！ 皇后様初々しくてすつごい可愛いんですけどっ！」

興奮し過ぎて自分の上司でもある小瑛の肩をバシバシと叩きながら、頬を染めてキラキラと一人を見つめる梅瑛。

流石に興奮し過ぎている彼女に呆れて、小瑛が鋭く睨める。

その横で叔牙は一人を見つめたまま静かに微笑んでいた。

一 田中 ～民許の賜り～（後書き）

辟方は口リコンではあります。 （笑
文章を読み返すとこれ、口リコンにも取れるな……と改めて気付きました。

そういう嗜好は持つていませんので期待しては駄目です。
非常に残念ながら応えられません。

えー、今回ちょっとと物足りない感じになってしまってすみません。
私も書いていて物足りなかつたです。

とは言え儀式についてはこれ以上掘り下げる必要はないし、二人の
関係もここではこれ以上進む予定はないので我慢ス……。

一一日目～移動～

茜国^{せんこく}皇家の婚姻の儀は三日に亘つて執り行われ、その三日の間に花嫁は自國の民と近隣諸国に大々的に披露される。

一日目は近隣の有力者への披露日が、二日目は国民への披露日、三日目は国の官吏たちへの披露日が行われるのだが、その中で最も大変なのが一日目であった。

何故ならその日の行動が儀式によつて定められているため、誰もが皇帝と皇后の動きを知つているのだ。

しかも、大宗廟へ詣^{もうけ}する参詣の儀では皇帝と花嫁、その護衛たちから成る参詣行列は必ず大通りを通ることが決まつてゐる。

そのために万全の警備体制が敷かれるのだが、それでも総ての害意を防げるわけではない。事実、何代か前の皇帝の時代に、一日目の参詣の儀の移動中に暗殺された花嫁がいるほどだ。

だからこそ一日目の移動時には殆どの花嫁が怯えてしまい、壁がなく周囲から丸見えの輿ではなく、しつかりとした壁がある車での移動を花嫁が希望する。その上王宮の外に出ること自体を渋つたり、車から降りるのを嫌がつたり、今度は大宗廟から帰ることを拒んだりと花嫁が怖がつて問題を起こすことが多かつた。

それ故にいつも以上にピリピリとしていた、参詣行列の警備担当である禁軍第一軍 通称“近衛隊” の面々の口が呆けたようにぽかんと開いていた。

「だから私は輿で行くと言つていい」

「し、しかし……」

「何を揉めている?」

褒?が目を据わらせて男と言い合つていると声が掛かる。振り返ると、叔牙と知らない大男を連れた辟方が歩いてくるのが見えた。

* * *

先ほど、円舞台から前室に戻った褒?と辟方は、次の参詣の儀の準備のために別行動になつた。

あまり時間がないらしく、辟方が叔牙を連れて慌しく出て行くのを見送ると、褒?も小瑛、梅瑛と共に前室を後にした。それから、自分の室に戻ると素早く羽織を着せられ、頭に薄布の付いた冠を付けられる。

「これ透けているけど、この薄布って必要なの?」

「はい。皇后様のこの尊顔を直接拝謁するのは恐れ多いことですから」

薄布を片手で掴みながら褒?が尋ねると、小瑛が丁寧に答えてくれた。
しかしその理屈に納得がいかない褒?は眉を寄せる。

「その理屈はよく分からない」

「ふふふ。ならばこれも儀式のしきたりとお考え下さー」

素直に言葉を返す褒?の様子が微笑ましく、小瑛は悪戯を教えるように言った。

その言葉に「そんなものなのか」と呟く彼女に小瑛の笑みが深くなる。

「では皇后様」

「うん。行きましょう」

小瑛が呼びかけると、すぐに顔を引き締めた褒？は小さく首肯し、小瑛の後ろに立つて歩き出す。

その後姿を、参詣にはついて行けない梅瑛が頭を下げて見送った。

そして辿り着いた王宮玄関前には青毛の馬に繋がれた豪奢な朱い車が待っていた。

褒？はその車を見て足を止める。

足を止めた彼女に気付いた小瑛が褒？を振り返り問いかけた。

「皇后様、如何致しました？」

しかしその問いに一向に答えない彼女に小瑛は不審そうに眉を寄せる。

すると、皇后の姿に気付いた近衛隊の一人が足早に近づいて来た。怪訝そうに褒？の姿を見た後、隣にいる小瑛に説明を求めて視線を向ける。

「……何故車が用意されているの？」

漸く口を開いた褒？の言葉に小瑛と男は目を見開いた。

* * *

それから褒?と男は辟方が来るまで延々と言い争っていた訳だが、二人は辟方の姿を認めると同時に声を上げた。

「陛下」

「辟方！君からも言つて」

「ん？」

二人の というよりも褒?の剣幕に驚きつつ辟方が話を促すと、男が口を開くよりも先に褒?が口早に言い募った。

「妖獸は駄目、馬も駄目、輿も駄目。この人駄目としか言わないのよー。」

忌々しそうに訴える褒?の言葉は意味不明だ。余程怒っているらしく、圧倒的に言葉が足りない。

しかし、状況から鑑みて大宗廟への移動手段について言つているらしいと辟方はあたりをつけた。

「ふむ。車の何が不満なんだ？」

辟方は今回の移動は安全性の高い車だと考えていた。だからこそ車を用意させたのだが、それを褒?が何故不満に思うのかが分からなかつた。

「当たり前でしょう！ 折角襲撃出来る機会^{チャンス}なのよ？ 車に乗つてどうするのよー。」

「……」

褒?の言葉に周囲にいた人間が啞然と目と口を見開いた。
彼女の可笑しな発言に空間が凍りついていた。

それもその筈である。

襲撃される側の褒?が、瞳を爛々と輝かせてその機会^{チャンス}を好機として語るなどと誰が思つだろつ?

しかし、逸早く立ち直つた辟方は既視感を感じて苦笑を浮かべた。
その光景は正しく昨夜の再現である。

どうやら彼女の強者に会いたいという欲望は本物らしい。
いや、どちらかと言うと戦闘出来る機会を逃したくないだけのよう
にも見えるが。

しかし、褒?と言ひ争つていた男には氣の毒なことをしてしまった
ようだ。

彼女の安全を最優先に考慮したにも関わらず、その相手に文句を付
けられたのだから堪つたものではないだらう。その上、その相手が
自國の后では反論も出来まい。

男の泣きやうな表情と額にびっしりと浮いた汗　冷や汗だらう
が何とも言えず哀れだった。

兎にも角にも、褒?は車での移動を断固拒否しているようだ。

しかし、警備配置は勿論のこと、兵士たちにも車での移動を前提と
した警備を言い渡してある。

それをこの土壇場で変えるとなれば、兵士たちの間に少なからず動
搖を招くだらう。そうして生まれた隙を突かれて、本当に襲撃され
ては目も当てられない。もしそうなれば、国民に軍への不信感を植
え付けてしまいかねないのだ。

ここは褒?には悪いが、我慢して車で移動するよう説得するしかな
い。

辟方が考え込んでいる一方で、褒?は腹立つていた。

こちらの言い分を聞いた筈なのに、何かを考え込んでいる辟方は難しい顔をしたまま黙つている。

いくら鈍い褒?とて、その表情を見れば何を考えているのかは分かる。分かるからこそ腹が立つた。

辟方は明らかに車で移動させる気だ。頭ごなしに安全性を説いて反対するだけ。

昨夜、自分の実力の一部を見たはずなのに、辟方は褒?の力を理解していないらしい。まるでお前は無力だ、と言われているようで、そのことが何よりも腹立たしくて仕方なかつた。

もし、この場にいるのが父である夷吾ならば、褒?の力を信じて任せてくれただろう。だのに何故辟方は信じないのか、そう考えるだけで無性に苛々する。

「いいではありますんか」

そこにやけに力強い声が響く。

その低い声の主を探すと、そこには辟方と共にやつて来た大男がいた。西国でよく見られる茶色の髪と瞳をした彼は、筋骨隆々の身体に武具を身につけ、だらけたように立ちながらもそこには一切の隙もない。

そこから窺える彼の実力と堂々としたその体躯^{すがた}に、褒?は先ほどまでの苛立ちを瞬時に忘れて見惚れた。その視線に確かに羨望と尊敬の念を込めて。

そんな褒?の様子に気付いた辟方は、ムツとして顔を顰める。しかし、大男を無心に見つめる褒?が彼の様子に気付くことはなかった。

I 四三 ～移動～（後書き）

文章中の“車”とは、自動車のことではなく馬車のことを持ちます。

中途半端な所で切ってすみません～
続き、早く更新出来るよう頑張りまーす

「管后様、お初に御目にかかる。小官は禁軍上將軍を任されており
ます林項燕と申します。以後お見知りおきを」

一步前に出て立礼をした項燕の動きには優雅さはなかつたものの、
力強さと頼もしさが感じられた。
漢らしいがつちりとした筋肉に馴染んだ仕草に、内心で大歓声を上
げつつ熱狂してしまつ。

(何て素敵な筋肉！ こんな素敵な筋肉に出会つたのは一度目だわ
！あの背中に飛びついてあの素敵な上腕二頭筋に頬擦りしたい
～～つ～～)

褒？としては、飛びついて撫で回して擦り擦りして質問攻めにしつ
つ、手合わせを願い出たいところであつた。だが、タイミング良く
聞こえた叔牙の空咳で現状を思い出す。

冷静になり、衆目に晒されている中ですべき言動ではないことに思
い至つた褒？は、内心、ガッカリしつつもにこやかに笑つて項燕に
頷き返した。

「林上将、こちらこそ宜しく頼みます」
「承知致しました」

褒？の返礼に、にかつと漢らしく笑つた項燕は、思わず興奮してし
まつほど素敵で、褒？はキラキラした眼差しを一心に注ぐ。
そこに不機嫌そうな顔をした辟方が割つて入つてきた。

「頃燕、勝手なことを言つな」

「おや、陛下。何がいかんのです？」

「部下が動搖するだらうが」

呆れたように言いつつも真剣な眼差しで見つめてくる辟方を、頃燕は軽く笑い飛ばした。

「はつ！ そんなことで動搖するような軟弱者はござませんよ
「……やつでもなさそうだが？」

頃燕の台詞を聞いた途端、周りの兵士たちが一瞬にして静かになつた。頃燕の姿を視界に入れないように田を逸らす者や顔を引き攣らせる者、汗をかいている者らがあちこちに見える。

そんな部下の様子に気付きながらも、頃燕はきつぱりと言い切つた。笑顔で。

「護衛対象である皇后様よりも軟弱な者がいたら、そこは責任を持つて地獄を見せますよ」

ひいつとこう情けない悲鳴がちらほらと上がる。入り口の方に立つ兵士など、顔色が青を通り越して白くなりながら、尋常じゃない量の汗をかいているのが見えた。

氣の毒過ぎるその姿に憐れみを誘われた。とは言え、細かい所まで口を出すのは辟方の方針ではない。仕方なく釘を刺すに留める。

「はあ……頃燕。兵士を使い物にならなくされると困るのだが？」「任せて下さい」

そう言いながら「わはは」と豪快に笑う頃燕は見るからにやる氣満々で、辟方の釘などでは止められそうになかった。

一人の話が少々脱線していた所に叔牙から声を掛けられた。いつの間にか少し離れていた彼は、穏やかに笑いながら歩み寄つて来る。

「陛下、皇后様のお望みですし、構わないのですが？」

「叔牙？」

「元々、参詣での移動は輿で行つものですし」

いぶかしむ辟方に、話しながら彼に歩み寄つた叔牙は声を潜めて報告した。

「夷吾殿からの報告です。車には揮発性の毒物が塗布されています」「！」

「祭祀用の大輿は密閉空間ではないので同じ心配はありません。大輿を夷吾殿が調査した結果、細工された様子はないと只今報告がありました」

周囲にいた兵士たちには聞こえなかつたようだが、すぐ近くにいた褒？と項燕には聞こえたらしい。項燕はにやりと不敵に笑い、褒？は喜色満面の笑顔を浮かべた。

そこで喜ぶのは間違つていいだろ？と辟方は叫びたい気持ちをため息として吐き出す。

「分かつた。大輿を用意しな」

「直ちに」

辟方の命令に叔牙が頭を下げて、後ろに控えていた文官に伝令を伝える。伝令を聞いた文官は一礼するとそそくさと奥へと消えていった。

それを見届けてから叔牙が再び声をかけてきた。

「陛下。陛下は皇后様とお話になつて下わこ」

「は？」

「あんなに興奮していっては何をしでかすか分かりません」

ちらつと辟方の後方にいる褒?を窺いつつ、にっこり笑いながら呴いた言葉はかなり失礼だった。

しかし辟方はその言葉を訂正することなく、厭そうに顔を顰める。

「俺にアレを宥めると?」

「貴方の妻でしょ?」

「……はあ」

笑顔で突きつけられた事実に泣きたくなつてきた。なんだか褒?の夫と言うより、保護者が飼い主な気分だ。

辟方は少し肩を落としつつ、褒?の元へ歩いて行く。
叔牙がそんな主の後姿を眺めていると、まだそこにはいた頃燕が歩み寄ってきた。

「面白い姫さんだな」

「興味がなかつたのでは?」

「興味出た」

頃燕の言葉に思わず叔牙が顔を上げて頃燕を見上げると、彼はにやり笑いかけた。

叔牙は瞳を細めて真偽を見極めようとす。

「何故です?」

「あんな期待に満ちた瞳で見つめられたらねえ? 僕に何を期待したのか知りたくなるつてもんよ。

しかも、それを見た陛下はムツとしてるし、ありや絶対面白くなる

ゼ?」

頸に手を当てながら「いやいやと」やけの頃燕の問いには賛成出来なかつた。と言つた、したくない。

「貴方は引っ搔き回すだけですから、性質たちが悪いんですよ……」

「あの一人が心からくつづくのは悪くないだろ?」

「それは構いませんが……」

言い済る叔牙は、しかしこの件に頃燕が関わるのを断固として拒否したかつた。

(そもそも貴方と褒?は氣かのじよが合あいそうだから会わせたくないといふのに。この一人に好き勝手に暴れられたら止められる者がいなくななるでしょううが……)

そんな叔牙の氣苦労を頃燕はもちろん誰も知る由はなかつた。

叔牙が内心で深々とため息をついている頃。

褒?が未だ見ぬ襲撃者に思いを馳せていくと、辟方が声を掛けた。

「褒?、少し落ち着け」

「……何ですか?」

水を差された褒?はあからさまにむつとする。

そんな褒?のぶつ飛び具合に顔を引き攣らせながら、辟方は上から言い聞かせるように見下ろした。

「いいから聞け」

そこには、昨夜感じた冷氣を感じて、渋々辟方に向き直る。

「喜んでいる所悪いが、お前は戦えないだろ？」「

「何故ですか？」

「武器を持っていないだろ？」「

「持っていますよ？」「

予想外の返答に辟方は目を見開いた。

「そんな報告は受けていない！」

苛々してきた褒？は叫んだ辟方を馬鹿にするよつて見つめながら、淡々と言い返す。

「武器の4つ5つ、誰にも気付かれずに隠すくらい簡単です」「

「そんなわけあるか！」「

「良い女の嗜みです」

「勘違いだ！ どこでそんな間違った知識を教えられた？！」「

「母様が言つていました」

忌々しそうに舌打ちをする辟方に、褒？の苛々が更に積もる。

「ちつーーー！ だから管一族はつーーー お前の母が間違っているんだーーー！」

「父様も頷いていました」

「お前の両親が間違っているんだーーー！」

「私はそつは思ひません。陛下が間違つておられるのでは？」「..」

家族を悪く言つた相手に優しくするほど褒?はお人好しではない。辟方思いつきり冷めた瞳で見返すと、彼は苛々と叫んだ。

「ああ言えばいつ言いやがつて……！」

それはこちらの科白だ、と褒?は内心で毒づいた。自分の非を認めようとしないなんて狭量な男だな、と彼に対するなけなしの好感度が一気に下落していく。

二人はお互に顔を背けて視界からその姿を消すと、用意が調つた旨を告げに叔父が声を掛けるまで、お互に一步離れた場所に立つたまま苛立ちをぶつけ合つていた。

一 田川 ～上將軍～（後書き）

あれ？ 何故だひつ？
イチャイチャかりどん遠ざかってこへ……。

自分の一田惚れを言じられない性質のせいで、予定より遠回りして
あつかなとしては言じるんだがね。うふ。

一四三 招かざる招かれる訪問者

そんな騒ぎが王宮内で起きている中、外の王宮前広場では国軍の王都警備隊が広場に集まつた国民の誘導を行つていた。この後、王宮から出てくる参詣行列が通るための道を作り、そこに何か異常がないか点検するために広場にいた人間を散らしている。

元々王都にいる人間などは、勝手が分かつてゐるために速やかに協力してくれるが、流石に皇帝の婚姻という嘉礼だけあつて観光客などが多く、作業が捗らずに遅れていた。

そんな騒がしい王宮前広場で、じつと佇んだまま皇帝夫妻の姿が消えた円舞台の奥を見ている男がいた。

人々を誘導していた兵士の一人がその男に気付き、声を掛ける。

「すみません」
「あ、はい」

声を掛けられた男が兵士の方を向くと、人の良さそつた顔をした兵士が眉尻を下げながらひょこっと頭を下げた。

「これからここ、参詣行列が通るんですよ。お手数ですけど移動してもらいたいんですね」

「ああ、そうなんですか？ では、邪魔をしてしまいましたね。すみませんでした」

心底申し訳なさそつた男に兵士は頭を搔きつつ笑う。

「いえいえ、こっちの都合ですから、こちらこそ協力感謝します」

またまたひょこつと頭を下げた兵士に、「わざわざありがとうございます」と返して、一步踏み出した男は、しかしそくに兵士を振り返った。

「あの、この後の行列って何処なら見えますか？」

「行列ですか？ 今からだと大通りは既に人で溢れ返ってるから難しいですね」

「そうですか」

兵士の言葉を聞いて考え込んでしまった男を見かねて、兵士は又聞きの情報を教える。

「ああ、でも大宗廟の近くなら見れるかもせんよ？ 皆大通りで行列を見るのであつちには人が少ないとか」

「そうなんですか？ ありがとうございます。それならそつちに行つてみます」

「ああでもそつちは警備の つてあれ？」

兵士が注意をしようとするが、男は既に立ち去つた後で人ごみに紛れてしまっていた。それを見て「あちゃ～」と頭を搔いた兵士は、しかしそくに背後から「師帥しすけいー！ どこつすかー？」と自分を呼ぶ声が聞こえて「まあいいか」と呟くと再び誘導作業に戻つていく。

と、その途中で見知つた人を見つけて声を掛けた。

「あれ～？ 見に来てたんですか？」

「当たり前じやない。私の可愛い子の晴れ舞台なのよ？ それより、師帥ともあろう人が何故人民誘導なんてやっているの？」

「そうですか～。まあどうでもいいんですけどね～。あ、俺は司令部から将軍に叩き出されまして～」

そこまで言つたところで兵士は彼女の笑顔が変わったことに気付いた。その笑みは、周囲の温度を下げる事なく此方の背筋だけを凍らせていぐ。

「どうでもいいってどうこうこと？ その腐った脳みそ潰しましょうか？」

「あはは～、遠慮しますよ～」

しかし、その兵士はそんな冷氣に怯むような人間ではなかつた。先ほどまでと同じように笑いながら、手をぞんざいに振つて拒否した兵士は、というか俺の叩き出された話は無視ですか～？ と問いかける。もつとも、彼女には彼の科白諸共綺麗さっぱり無視されたが。

「まあ、いいわ。ちょうど良かったし。……何か変わったことはなかつた？」

にっこり笑つてもう一度威嚇した彼女は、後半笑みを消して真剣な眼差しで尋ねた。

そんな彼女に対し、兵士は一度だけ笑みを消すと、またへらへら笑いながら軽く答える。

「皇帝夫婦の観察者はちらほらいましたね～。ただその中に見慣れぬ旅人が一人、謀とか暗躍が好きそうな感じの人がありましたよ～。あ、近くにはいませんでしたがお仲間がいるよ～」

「そう。その旅人は？」

「大宗廟の方は人がいないので参詣行列見れますよ～って教えたら、そつち行くつて言つてました～。ただ最後まで話を聞いてくれなくて、『そつちは警備の人間しかいませんよ～』って言いそびれてしまつて～」

兵士は頭の後ろを搔きながら、どうしましょ～？ と笑つた。何とも胡散臭いその姿に彼女は胡乱な目を向け低い声で訊ねる。

「……貴方、わざとでしょ～？」

「大丈夫でしょ～？ 行列には近衛隊いるし、正直彼女一人でも問題ないと思つけど～？」

片手を上下にひらひらさせて軽く言つ兵士に、彼女は眉を寄せた。彼をしつかりと睨みつけてから、顎に軽く手を当てて呟く。

「でも、あの子も万能じやないのよ？ まだまだ子供だし……」

「そりゃそうでしょ～けど～。……つて、あれ～？ 彼女もう22歳じゃなかつたっけ～？」

「そりゃなんだけどね……はあ。あの子、人の悪意とか害意に鈍感だから……人間は欲望で国すら殺すというのに、そんなことになると露ほども思つていないので……大丈夫かしら？」

彼女は悩ましげなため息をつくと、ぶつぶつと子煩惱なことを言い始める。

彼女の呟く内容が内容なだけに流石の兵士も顔を引き攣らせた。

「といふか、國すら殺すとか簡単に言わないでくれませんか～？ 貴女が言つと生々しくて洒落にならないんですけど～」

「当たり前でしょ～？ 事実なんだから。……ああ、やっぱり心配だから大宗廟の方に行つてみようかしら？」

「見つからぬことひて下せよ～？」

誰に言つて居るのかしら？と彼女が剣呑な顔で聞くとすぐに貴女ですよ～、と暢気な答えが返ってきた。本当に食えない男である。しかしあぐに思考があの子のことに戻ると、彼女の顔に笑みが浮かんだ。

「ふふふ。人知れず陰で暗躍してあの子を[おも]ねる……」いつのまですごく楽しいわね。これからもやろうかしら？」

明らかに本氣の眼をして居る彼女に、兵士の男はうそをつする。

「わづこつのは夫君に相談してからやつて下せよ～？」

「嫌よ。それじゃあ面白くないもの。……それに、あの人だつたらすぐに気付くわ」

言外に、彼は優秀なのよ～、と夫の自慢兼惚氣る彼女に、

「はいはー」

と兵士は適当な相槌を打つた。

「あまり大事にしなこトやつよ～、三娘様？」

小声で低く忠告すると、彼は今度こそ自分を呼んで居る部下の下へ向かつた。

* * *

一方、人ごみに紛れた男が流れに乗つて歩いていると、後ろから小柄な青年が近寄つて来る。

「花嫁はどうだつた？」

問い合わせながら男の横に並んだ青年は目を細めて彼を見上げた。

「思つていたのとは違つたな」

「ああ、なんか素直そうだつたね」

「……まあ、父親とも母親とも違つよつだな」

前を向いたまま男は唇を吊り上げる。その笑みに隠された好奇心と少しの苛立ちを見つけた青年はにやつと笑つた。

「何？ その含みのある言ひ方は」

「あれだけでそう判断するほど馬鹿じやない」

青年を見下した男の視線には多分に嘲りの感情が含まれていた。それを見咎めた青年は声を上げて憤慨する。

「うわー、馬鹿にされた！」

「これ位は氣付くか」

「莊^{そつ}」

「ふつ。まあこれからだ、宝^{ぼう}。管家の警備を搔い潜つて情報を得ることは難しいが、王宮ならどうとでもなる」

低く名を呼んで非難した青年を男は軽く笑つて流した。そして漸く顔を青年に向けた男は、彼の名を呼ぶとふてぶてしく嗤つた。
青年は肩を竦めて答える。

「王宮へのは何処も隙があるからな」

「ああ」

「と言づかあれば管家の方がおかしいんだ。ただの娘なのにそいつの皇族より警備が厳しこりでござることだよ」

手を頭の後ろで組んで歩きながら非難した青年に、再び前を向いた男が片頬を上げて笑つた。

「ただの娘ならば、な

「何があるのか？」

「さあな。あの娘に関して分かつているのはあが養子で夜郎ではないことだけだ」

男の答えを聞いて眉を寄せて唸つた青年は、男の顔を見上げて再び問つた。

「養子つてのは分かるナビ、本当に夜郎じやないのか？ 真つ黒の髪と眼なんだろ？」

「ああ」

「そこも何かあるつてことか？」

「恐らくな」

「それもこれからつてことか……。んで？ これからどうする？..」

素つ気ない男の返答にこれ以上聞き出すのを諦めた青年は、前を向いて横田で男を見ながら軽く聞く。

「もう少し付き合へ」

「何する氣だよ？」

立ち止まって訝しがる青年に、男は振り返って囁いた。

「ふつ。ちょっとした挨拶だ」

一四三 ～招かれる招かれる訪問者～（後書き）

新たな人物の登場です。

本当はこんなに長くする予定なかつたんですが、何故か1話分に…
おちゃめな彼女が出てきましたせいつすね。

そんな彼女、大好きですが（笑）

次話から漸く暗躍する者たちが表で本格的に動き出します。
そこからは一寧に書きつつもなるべくテンポよくいくようにしてい
きます。

と言つて、どちらかといつとテンポの方を大事に書いていくので、
書き漏れが出そうですがそこは小話や後からの編集で書き足したり
して何とかしていきます。

私のスペックが低いので書き漏れはきっと起ります。気をつけま
すが。

どうぞ宜しく～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7795w/>

条件付きの結婚生活

2011年11月10日23時53分発行